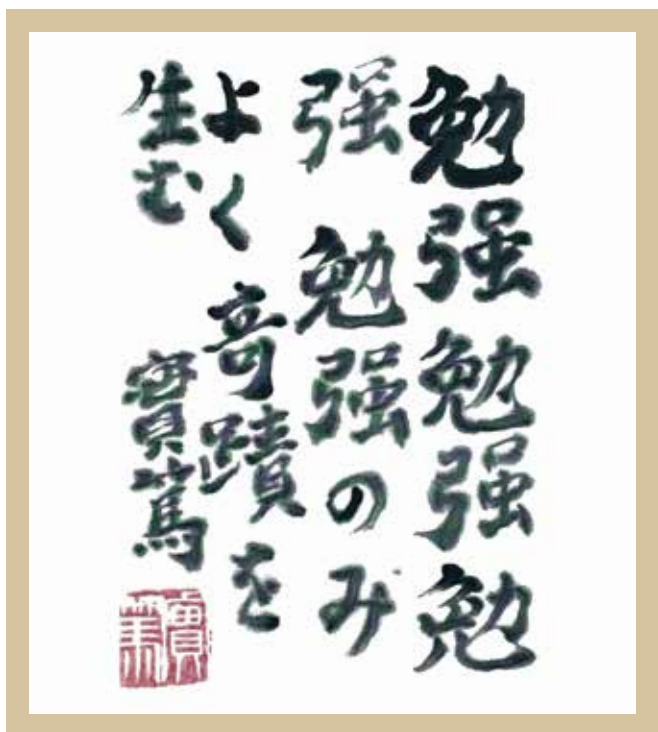


新しき村

3月号

2023年 Atarashiki-Mura
(since 1918年)



特集

武者小路実篤「勉強、勉強、勉強、勉強のみ よく奇蹟を生む」

志賀直哉「武者小路の絵」

武者小路穰「スケッチ帖のこと」

調布市武者小路実篤記念館の紹介と春季展

新しき村創立から第23年（埼玉の東の村の開設二年目）：昭和15年（1940）

新しき村 三月号 目次

巻頭 新しき村のフォトギャラリー 4

「勉強、勉強、勉強、勉強のみよく奇蹟を生む」…… 武者小路実篤 12

武者小路の絵 …… 志賀直哉 14

スケッチ帖のこと …… 武者小路穂 16

調布市武者小路実篤記念館の紹介と春季展 …… 20

〈春季展〉思い切って咲くもの萬歳——花と実篤—— …… 26

役員就任のご挨拶 …… 28

村の歴史を絶やさない …… 評議員 吉澤伊佐夫 28

実篤とのご縁——評議員就任にあたって…… 評議員 柏原公毅 28

「新しき村」にコンプライアンスはなぜ必要か…… 評議員 出口正之 29

新しき村を公益法人とする手続(六)と「新しき村」を使つての広報活動 …… 32

…… 理事 千賀修一 32

朝日新聞の記事掲載 …… 36

埼玉新しき村創立から 第二十二年 一九四〇年(昭和十五年) …… 38

寄付者名簿 …… 小松崎智 45

平野秀治さん追悼の言葉 …… 51





平野兄を偲んで	理事長 武者小路知行	51
弔辞	理事 千賀 修一	52
心底「新しき村」を愛した人	村外会員 前田 速夫	54
「場」をつくる — 平野秀治さんの遺志	村外会員 日比野英次	56
平野さん追悼	村外会員 北村 雅美	58
夢実現の途上で散った友を悼む	村外会員 山口 道朗	60
かけがえのない日々を	渡辺 兼次郎	62
武者小路実篤著『釈迦』を読む	小島 真樹	65
尾道にて(十一)	後藤 良雄	67
空気神社	小林 雅司	68
俳句 窓開けて	佐藤 ミツ	71
近頃考えること	中村 隆夫	72
実篤人生詩集「この道より」— 進め進め	武者小路実篤	75
会員だより		76
編集室・原稿募集		79
新しき村の会員募集・新しき村の地図		80
新しき村の精神		81

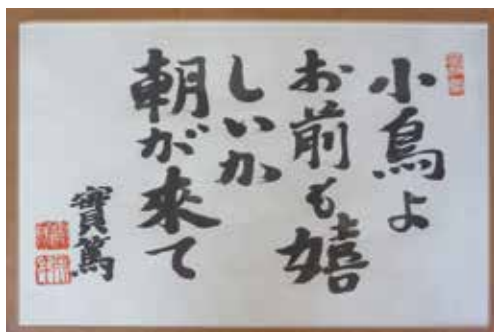
題字・絵 武者小路実篤

新しき村のフォトギャラリー

二月



1月5日村の新年会（公会堂で理事長はじめ村内会員・村外会員が集まり、今年度のスタートを祝う。）



屋根の上で仲良く日向ぼっこをするふくら雀（ふくら雀とは、寒空から身を守るため自分で羽の中に空気の層をつくり、見た目がふっくらしている雀）



梅の花



メジロ（毛呂山町指定の町の鳥）



地域猫のシーちゃん



地域猫のビーちゃん



雪の日の餅つき

二月一日



雪が積もる男子寮方面を望む



公会堂から茶畑の向こう城山方面の雪景色

2月10日は久しぶりの雪ふりだった。



公会堂前から増田荘方面を望む



正門を抜けて茶畑の向こうに生活館



ロウバイの花

2月11日霜降りの翌日快晴の村の景色。この日理事会が開催された。



昭和58年美術館前に設置された「いのり」高田博厚(彫刻家・勲三等瑞宝章受章)作



太陽光パネルに積もった雪・奥は公会堂



雪が残る大愛堂



正門を抜けて茶畑の向こうに生活館



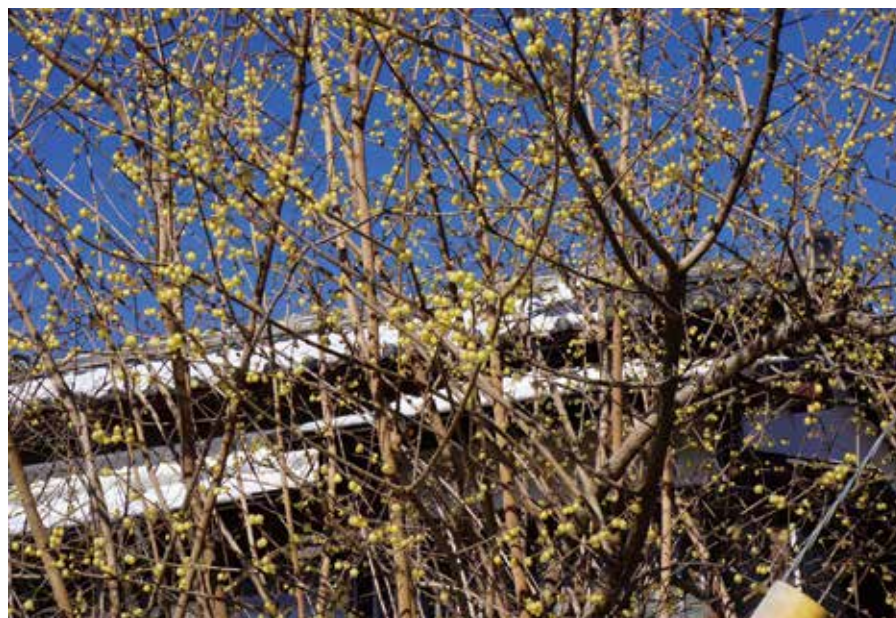
公会堂前の柚子の木。毛呂山町は、江戸時代からゆずが栽培され、「桂木ゆず」の銘柄として全国に知られるようになり、ゆずの名産地である。



大愛堂近くで咲く梅



村の隣地にある大黒天の像



大愛堂近くで咲くロウバイ

勉強、勉強、勉強、勉強のみ よく奇蹟を生む

武者小路 実篤



絵を描く実篤(昭和40年代)

自分の力の不足をまず知ることは、人間を不平家にしない。

「苦しいという言葉だけはどんなことがあっても言わないでよそうじゃないか」高杉晋作はそう言ったと聞く。

人間は自分に不可能なことは責任をもつ必要はない。しかし自分の力をまだ十分に出しもしないで、私には出来ないとかきらめるのは早い。

「勉強、勉強、勉強のみよく奇蹟を生む」

自分はそう思っている。しかしそれには男子の意気が必要だ。奇蹟という言葉にひっかかってはいけない。出来ないと思われることが出来るという意味で、あたりまえと言えはあたりまえなのだ。ただ今まで出来なかったことが、いつのまにかできるようになるのだ。自分は十八九の時文章をかくことが下手だった。あることで文章をかく必要を感じた。

それから毎日必ず何かかくことにした。一年つづけているうちに、いくらかかけるようになった。

自分はまた画をかくことが実にまずい。形さえとれなかった。しかし十年暇を見て勉強しているうちにどうにか形がとれて来た。僕が画を描くなぞと言ったら昔の僕きり知らないものは奇蹟のように驚くであろう。



武者小路実篤画集（昭和32年4月1日）の「私の書集に」から転載

しかし人間は本当に不可能なことはしたいと思わない。人間に可能なことだけが出来たら大したことなのだ。そして人間に可能なことをやりとげるには根気と勉強である。後は年月である。

一年で出来ないことは二年で、三年で、四年で、五年で、十年で、十年一日の如く勉強出来るものは必ず一方に図抜けることの出来る人間だと自分は思っている。

武者小路の絵

志賀 直哉

武者小路実篤が絵を始めたのは私が奈良にゐて、武者も一年程来て住んだ事があり、その頃だから、もう三十五六年前の事になる。私は、その時、これが文学や新しき村の仕事のやうに武者の一生の仕事になるとは思はなかつた。

武者は文学の方では写生といふ事を仕ない方だが、絵では徹頭徹尾、写生で、それに適切な讃を書く事がうまかつた。

日本にゴッホを初めて紹介したのは武者だった。日本は勿論、欧羅巴でも一般的にはそれ程、知られてゐなかつたゴッホを武者は独乙語の美術雑誌で発見し、私達に教えてくれた。当時の私達にはゴッホの絵は随分變つて見えた。それを武者は日本で最初に認めたのである。北欧のムンクなども變つた画家であるが、見



ゴッホの「タンギー爺さん」
(wikipedia より出典)

出したのは矢張り武者だった。

このやうに武者は若い頃から色々な画家の画集を持つてゐたが、今も豪華な画集をよく買って、久しぶりに訪ねる私に、それを見せてくれる。昔も今もさういふものに対する情熱が少しも変わらないのに私は驚く。ところが不思議な事は武者の画はそれらの画から殆ど影響らしいものを受けない事である。よき刺激を受け、仕事のよき糧となつてゐる事は確かだが、技術的に顕はな影響は決して受けないのである。例外として、自画像にゴッホの「タンギー爺さん」を想はずものはあるが、これは点や線に先天的に共通なものを武

者が持つてゐるからだとは私は思つてゐる。

武者は普通の画家のように下絵というものを描かない。いつも、所謂「ぶつつけ本番」で、用意ドンで駆け出したら、負けても勝つても、決勝点までは真直ぐに馳けて行くという流儀である。

武者は今でもよく自分の絵に就いて「ものになつて来た」とか「そのうちものにして見せる」というやうな事を書くが、若き頃から絶えずこの気持を持続ける事は武者一流の生き方で、武者は人が毎日飯を食うやうに絵を描いてゐるが、人間には年齢的に体力の限界はあるから、もう少し身体をいたはりながら武者一流の生き方で、長生きをして貰いたい。



「武者小路実篤の自画像」より出典

私は近頃、時々武者の絵を眺め、しみじみとした楽しい気持になる。

〔私の画冊について〕昭和三八年五月十日 角川書店発行）から原文のまま転載



スケッチ帖のこと

武者小路 穰

実篤の死後、八十冊に及ぶ大小さまざまなスケッチ帖が残されていた。描きかけがあったりして、各冊全



「武者小路実篤デッサン習作集」のファイルの表紙

部描ききつているとは限らないが、それでもたいへんな量である。じつは実篤のスケッチ帖はこれだけではない。調布市の武者小路記念館に寄贈されているものもあるし、記念として三鷹市に寄贈したものがあ、どうい

う経路からか青春白樺美術館に入っているものも、分散して個人蔵になっているものもあるもので、全部でどれくらいあるかはわからない。ときにはスケッチ帖ではなく、ありあわせの雑誌を送ってきた封筒の裏とか、雑誌の奥付ページの余白とか、その時の手元にあった紙に描いたものまで何点か残っている。今度新しき村の渡辺貫二さんの発案で、そのうちから自画像を主にしてこの画集を刊行することになったが、印刷にしたのはごくごく一部で、このスケッチ帖をいまつみあげてみると、よくも描いたものだと思う。

思い出してみると、たしかに居間の椅子に腰掛けて鉛筆をもってちよつと口をまげ、まじめな顔をしてスケッチをしているのを見かけた。私の知っているのは戦後の牟礼の家と仙川での晩年の生活だが、朝は早いほうで、自分で仕事場（牟礼では離れの十畳の縁側）の雨戸を明けて午前中はだいたい原稿を書き、午後は来客の相手をしたり、絵を描いたりしていた。原稿を書くときは傍に人がいるのを嫌ったが、絵はお客さんと話をしながらでも平気だった。人を選ばず、来たるを拒まずだったので、ときにははずいぶんいいかげんな来訪者もあって、仕事のじゃまになるのではないかと

心配になることもあったが、むしろ誰も来ない日はさびしいようだった。しかし、この仕事場や応接間ではあまりスケッチをすることはなく、どちらかというところ食事や来客の合間に休憩するときか、寝る前の居間で描いていることが多い方が多かったようである。

そのせいでもあるだろうが、スケッチした題材には、よく画題にして仕事場いっぱいどころがっていたジャ



貝とりんごと壺



ゼンマイと玉ねぎ

は、比較的早く入手して、日向の新しき村の書斎の棚の置いてある写真が残っている。ところが、村の資金調達のためにいったん手放し、その間の経過については聞いていないが、高村光太郎さんの手元にうつり、晩年に実篤のところに戻ってきたものである。その時には新しく木箱が造られていて、箱書は光太郎さんの字であった。



安子夫人と子供



安子夫人と子供

ガイモやカボチャなどの野菜はほとんどない。あればリンゴなどの果物だろう。目につくのはいま東京現代美術館にあるロダンの「小さなスフィンクス」である。これはいろいろな角度で描いている。このスフィンクス

この他の彫刻としては、マイヨールの婦人立像とエジプトの猫の首が多い。マイヨールの婦人立像はもともと二つあったので、やや大きい方の像はいまどこにあるか知らないが、小さいレプリカは猫の首といっしょに記念館に納められている。マ



子供4人

ち歩けるので、好きな描きたいものは居間に持って行って描いたのだろう。小さなスフィンクスは時々居間で見かけたこともあった。

それについて多いのは、安子像と自画像、自分の顔と手である。安子像は年代のちがういくつかの油彩もあるが、いつも居間では向き合っているのだから、描くには都合がいいし、気持ちよくかけたはずで、多いのも当然である。なかには描きかけて止めて、次のページでまた描いているのがよくあるが、これは多分途中で安子が用事で台所にも立ったからだろう。スケッチ帖ではポーズをとらせて描いたというのはない。この画集の中心になった自画像は、何か描きたい時にほかのものがなくても、いつでもあるから便利だなどと言って、鏡を見て描いていたし、手は当然左手

イヨールは仕事

場の棚に置いて

あることもあり、

猫の首は応接間

にあることが多

かったが、この

程度のもは持

である。

意外とこれは知

らない人が多いの

だが、実篤はス

ケッチはもちろ

ん、油彩でも水墨

彩色でも目の前に

ないものは描けな

かった。ふつうの

人は、あれだけ

ジャガイモだのカ

ボチャを描いたの

だから、見ないで

もそらで描ける

だろうと思うらしいが、実篤にしてみれば、ジャガイ

モにしてもカボチャにしても一つ一つに個性があるの

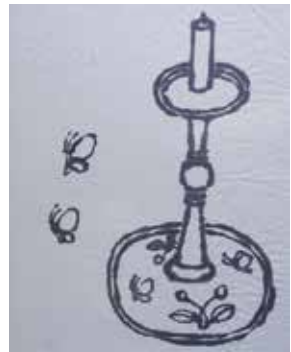
で、自分が勝手にその形を作ることではできなかったの

だと思う。だから、それを知っている画商は描いても

らいたいのものを持つてくる。そこで、なおさら居間で

のスケッチということになると、すぐそこにあるもの、

なかでもいつでも描けるものとしてまず自分の顔や手



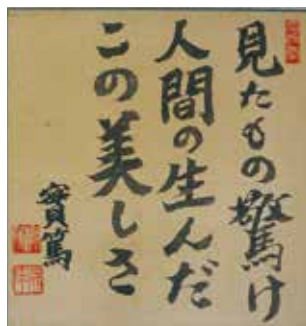
燭台



はさみとジャガイモ

があるというわけである。

ここでスケッチといってきたが、これは油彩あるいは水墨彩色をしあげるための下絵・素描、もしくは習作というのではなく、一つの作品としての「写生」なのである。逆にいえば、油彩でも水墨彩色の場合でも、下書・素描をもとにして描くことはなかった。いわば何時でも一本勝負で筆をおろすので、もしまずければ初めから描き直す。「ほくろの呼鈴」で辰子が書いたように、ジャガイモの芽の点を一つ余計にうってもそれはだめで、新しい紙で描き直しということになる。このスケッチも鉛筆でスケッチ帖に描いたというだけで、描く姿勢は筆とまつたく同じである。どの一本の線でも描きなぐるとか、走り描きというものではない。まじめに力を入れて対象の形を（中身を含めて）どこまでも正確にとらえようとしている。ではなぜ下絵でもない「写生」をこ



実篤の色紙

れほどくりかえしたのだろうか。それはやはり描きたかったからであり、描かなくてはいられたからだろう。実篤は文章にしても、書・画にしてもかかなくてはいられない人だった。よく頼まれれば何でも描くといわれたが、頼まれなくてもかきたくて仕方ないようだった。文章を書き、書を書き、絵を描くことで、自己の生きる証としたばかりか、自己の生命をかきたっていたのではないかと感じられる。このつみあげられたスケッチ帖は、その生命力なのである。

（和光大学名誉教授・武者小路知行理事長の父）
〔武者小路実篤の自画像―スケッチ帖より〕新しき村
一九九五年発行から転載・写真は編集者が他の資料より転載）



調布市武者小路実篤

記念館の紹介と春季展

武者小路実篤は「水のあるところに住みたい」という子どもの頃からの願いをかなえ、昭和三〇（一九五五）年、七〇歳の時に調布市の仙川の地に居を構え、九〇歳で亡くなるまで晩年の二〇年を過ごした。

調布市武者小路実篤記念館は、実篤没後、邸宅、数々の愛蔵品、遺品などが、ご遺族から調布市に寄贈されたことから、実篤の業績を顕彰し、市民の文化の向上に寄与するため、邸宅（現・実篤公園）に隣接する場所に昭和六〇（一九八五）年に開館した。

調布市の指定管理者として一般財団法人調布市武者小路実篤記念館が管理運営を行い、「武者小路実篤、白樺、新しき村」をキーワードに様々な資料の収集、保存、活用に努めている。多彩な実篤の活動を紹介するため、ほ

ぼ五週間ごとに年八回程度、様々なテーマで展示会を企画し、また、閲覧室では、実篤の著作をはじめ、雑誌『白樺』、日本近代文学・美術などの資料を開架している。

事業の概要

一 展示事業

武者小路実篤の文学、美術、演劇、思想と幅広い活動がわかりやすく理解できるよう多角的に魅力的な展示事業を開催

二 普及事業

武者小路実篤について、身近で、親しみのある教育、芸術、文化の場、地域の人々が気軽に学ぶ場を提供

三 資料収集・管理事業

実篤作品のほか、白樺派や新しき村などの実篤周辺の関連資料を幅広く収集し、展示、調査研究等へも活用

四 資料整理・保存事業

収集した資料の整理、データベース化、適切な環境での保存管理。また、必要に応じて資料の修復や複製の製

作による原資料の良好な保存

五 閲覧サービス・情報公開事業

資料の閲覧サービスやレファレンスサービスを実施。
また、情報提供システムの活用により、実篤や所蔵品などに関する情報を広く公開

六 調査・研究事業

「武者小路実篤、白樺、新しき村」の情報発信基地となるべく、調査・研究に取り組み、その成果の活用を図るとともに随時公表

実篤記念館外観

記念館は閑静な住宅街の中にある。館名板の揮毫は美術、文芸全般で幅広く活躍した文化勲章受章者、中川一政（一八九三―一九九一）による。中川は若き日から昭和五一（一九七六）年に実篤が亡くなるまで半世紀を超える親交があった。



記念館外観



展示室全景



実篤年表

展示室・展示コーナー

コンパクトな空間ゆえ、展示できる作品・資料の数は限られるが、年八回の展覧会を企画し入れ替えていくため、何度訪れても見飽きることはない。



展示コーナー



閲覧室

閲覧室
武者小路実篤全集をはじめ様々な著作本のほか、白樺派関係の各種書籍、美術書など約一五〇〇冊を開架。閉架資料も一部を除きレファレンスサービスを通じて閲覧することができるとができる。

中庭の梅の木

中庭に植えられている紅白の梅の木は、平成六（一九九四）年に資料館（展示コーナー、閲覧室、休憩コーナー）が増設された記念に新しき村から移植されたもの

ミュージアムショップ

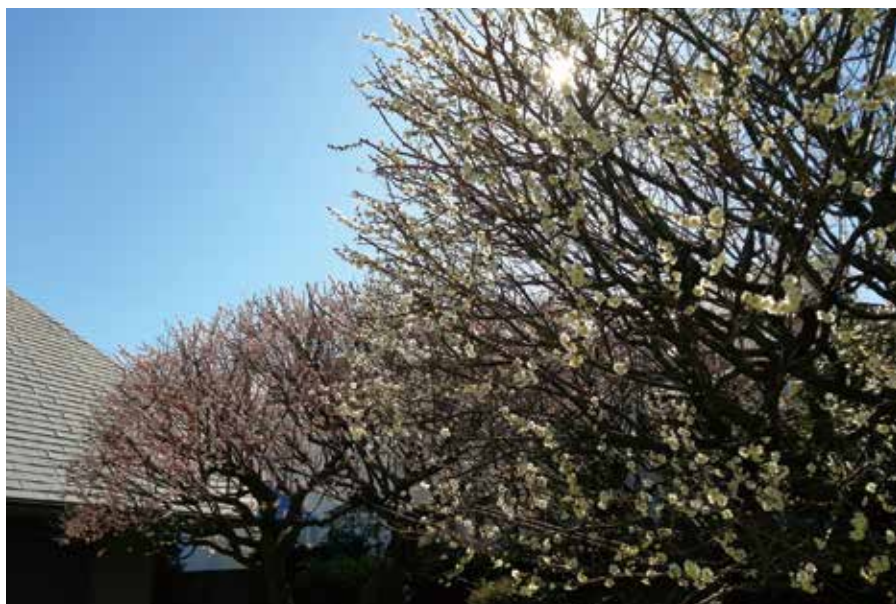
記念館ロビーにはミュージアムショップを併設している。実篤の著作本や特別展のパンフ、各種オリジナルグッズなどを販売。毎年バレンタインシーズンに限定販売する実篤チョコは数日で完売する人気商品（二〇二三年分は完売）



ミュージアムショップ



限定販売の実篤チョコ



梅の花

利用案内

・開館時間／九：〇〇～一七：〇〇
(閲覧室は一〇：〇〇～一六：〇〇)

・入場料／大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

※展示替え期間は半額

※調布市内在住六五歳以上は無料

※身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・愛の手帳
をお持ちの方、及び付添人は無料

※調布市在住・在学の小・中学生は、毎週土曜日に無料
パスが利用可

※「東京・ミュージアムぐるっとバス」利用可

・休館日／月曜日(祝日の場合は直後の平日)、

一二月二九日～一月三日

※展示室と閲覧室は別途休室日あり

・交通／京王線つじヶ丘駅または仙川駅下車 徒歩一〇分

小田急線成城学園前駅より「調布駅」または「つ

つじヶ丘駅南口」行きバス稲荷前下車 徒歩五分

・駐車場／乗用車五台

一般財団法人 調布市武者小路実篤記念館
〒一八二一〇〇〇三

東京都調布市若葉町一―八―三〇
電話・〇三―三三三二六―〇六四八

ホームページ：<https://www.mushakoji.org>



春季展

思い切って咲くもの萬歳

—花と実篤—

武者小路実篤は、常に生命の美しさと不思議さを見つめ、自然の中であるがまま、思い切って生きるものに美を見出し、書画や文章をとおして描いてきました。晩年の二〇年間を過ごした当時の仙川の家と、現在の旧実篤



邸と実篤公園の自然の様子からも、自然を愛した実篤の思いが感じられます。

本展覧会では実篤が愛し、描いた自然の中でも、花に関する作品や資料を中心に紹介します。実篤の目に映った色彩豊かな自然の美の世界をお楽しみください。作品を彩った書画道具もあわせて紹介します。

■会期

三月四日(土)～四月一六日(日)

午前九時～午後五時

*月曜(祝日の場合その翌日) 休館

■入場料

大人二〇〇円 小・中学生一〇〇円

■展示解説

解説…石井 彩由美(当館学芸員)

日時…三月一八日(土)、四月七日(金)

午後一時三〇分から四五分間程度

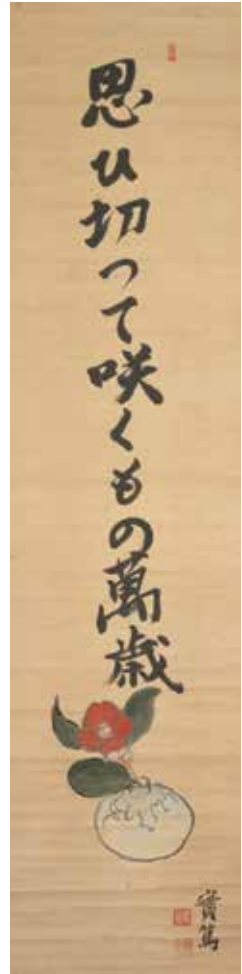
*入場料のみでどなたでも参加出来ます。参加希望の方は当日直接実篤記念館展示室にお集まりください。

春季展展示作品より



武者小路実篤「自然之傑作集」1941 - 1943年
紙本墨書墨画淡彩

大きな紙面に植物が大小のびやかに描かれ、実篤の自然への敬意が表れている。描いた順序や、一つひとつのモチーフの配置などから、実篤の画面構成の妙が見て取れる。



武者小路実篤 椿
「思ひきつて咲くもの」
1933年頃
紙本墨書墨画淡彩

実篤は、自然の中で思い思いに咲く花々を見て、個性が発揮されている様子を賛美し、描きとった。



武者小路実篤・武者小路安子「たのしい花」
1970年代 紙本墨書墨画淡彩

安子が桜草を描き、実篤が画讀を書いた合作。子や孫への贈りものとして、同様の扇子が何本か所蔵されている。

役員就任のご挨拶

村の歴史を絶やささない



評議員 吉澤伊佐夫

この度、新しき村の評議員に選出されました吉澤伊佐夫でございます。

昭和四八年に地元町役場に奉職し、今は退職後の人生を家族三人で「仲よき事は美しき哉」の心境で日々の生活を楽しんでいます。

さて、評議員選任にあたっての私の経緯でございますが、正直、新しき村との関係は全くと言っていいほど縁遠いものでした。中学校ころの友人から「新しき村って、どういったところ？」と聞かれ、「武者小路実篤氏が生活をしてるところ」程度しか知らず返事に困った事を記憶しています。その後も大きな関わりはありませんでしたが、評議員に選任された以上、今後は村の歴史や実篤氏の功績をしっかりと勉強し見

識を広めていきたいと思っております。

現在での新しき村は、村内共同生活者の急激な減少により、村そのものの存続が危ぶまれていると聞いています。一〇〇年以上続いている「新しき村」の歴史を絶やすことのないよう、理事や評議員の皆さんとよく話し合いながら、微力ながら自らの役職をしっかりと努めて参る所存でございます。どうぞご指導の程よろしく願います。

実篤とのご縁

―評議員就任にあたって―



評議員 柏原公毅

私と実篤の最初のご縁は、子どものころ、自宅に飾ってあった南瓜の複製書画に遡ります。当時の私には、武者小路実篤という名も、その人物像も知る由がなく、毎日目に入ってくる室内風景の一部でしかありませんでしたが、なぜか印象に残っています。

学生時代のご縁は、高校生の時分に「友情」を読んだきりでしたが、大学卒業後に調布市の職員となり、実篤記念館や実篤公園を身近に感じるようになりました。特に、一〇〇年ほど前からは、実篤公園、実篤記念館を所管する部署（環境部、教育部）に配属となり、平成二六年四月から令和三年三月まで七年にわたり、一般財団法人調布市武者小路実篤記念館の理事を務めさせていただきました。その後、定年を迎え一年の空白がありました。その後、令和四年四月に実篤記念館の常務理事として着任させていただきました。ふたたびのご縁に大きな喜びを感じつつ今日に至っております。

この度、一般財団法人新しき村の評議員に選任されましたことも、これまで同様に何かのご縁と言えましょう。新たな道を歩もうとしている新しき村の活動に、微力ながら協力させていただく所存です。また、これを機に、新しき村に係る多くの皆様方に、実篤記念館の活動について、改めてご理解いただく機会となれば幸いです。

「新しき村」にコンプライアンスはなぜ必要か



評議員 出口 正之

私は学生時代に、「規則、規則」といわれることがとても嫌でした。それぞれに判断能力に従っていればいいのだと思っていました。頭髮の長さの規制など何より規則自体の合理性も理解できるものではなかったからです。

ところが、今や社会を上げて「コンプライアンス、コンプライアンス」の大合唱です。

コンプライアンスの時代だ、法令遵守だと言われることに対して嫌悪感を覚える人が多いことも理解できます。しかし、ちょっと思い出してください。今世紀に入ってから「規制緩和」の大合唱でした。実は、日本では中央集権的で不透明で合理性のない規制はどんどん無くされてきま

した。それに対して、人々の権利を守るための法令はどんどんと増えてきています。人々が不利益を被ることがないように整備されてきたのです。例えば、平成二九年の法改正でどんなに少人数を扱う事業者であっても個人情報保護法が適用されるようになったことはご承知のとおりです。ネット社会の個人情報の漏洩によって、個人の財産や時には強盗やストーカーによって命までも奪われる可能性が出てきているからです。

このことによって、例えば同窓会のような組織でも同窓会名簿を簡単には公開できなくなりました。しかし、ネットの力を逆に借りて、個人情報保護法に抵触しない形で、従来の同窓会名簿と「機能的に一致するもの」を作り上げているところもあります。

「新しき村」では村外会員という重要なメンバーがいまいます。彼らの情報を全て共有して村の発展に活かそうではないかという考え方は、もちろん正しいものです。しかし、それは個人情報保護法を遵守した範囲でなければなりません。村外会員の方がオレオレ詐欺の犠牲にはなっては困ります。「村の発展に活かそう」という考え方と個人情報保護法を遵守することは実は両立は可能ですが、資金や作業も必要ですし、村外会員のIT能力などにも依存し

ます。つまり、すぐには実現できないかもしれませんが、実現可能なことです。

また、「新しき村」にはいろんなかわりを持つ方がいらっしやいます。皆が皆、この会合は誰それが出席すべきだ、誰それが〇〇役をやるべきだ、とそれぞれが勝手に思い込んでみると、船頭の多い船と同じことになります。組織が何をどのように、そして何を決めてだれが責任を取っているのかわからない状態を回避するために、代表理事、理事、理事会、評議員、評議員会それぞれの役割と責任が「法定」されました。これは組織を目的のために運営するため法定されたものです。組織を構成する人々は常に多様な意見を持つものです。これらを一つの組織として混乱なく動かせるように役割と責任が明確化されました。

「理事」とは何をする者かということに関して、勝手に名誉職と考えて組織に対する功労者が就任するべきである、とする文化が仮にあったとしましょう。「〇〇さんはこれまで村とかかわっていないのに、理事に入っているのはおかしい」といったような意見を持つ方も当然いらっしやるでしょう。しかし、法律で定められている役割は、「新しき村」の使命を実際に全うする力を必要とします。ただ名前を連ねとけばよいというものではなく「善良な管理者

の注意義務」（以下「善管注意義務」という）を果たしていかなければなりません。これを怠ったときには、損害賠償の対象にすらなりません。

公益法人は、税法上の優遇が認められていることから、営利会社と異なり強いコンプライアンスが求められます。

功労者に与えられる名誉職では全くないのです。役割さらには責任等も法定されていますので、法令違反があれば、役員（理事及び監事）と評議員には、内容にもよりますが、最高刑で「七年以下の懲役若しくは五百万円以下の罰金に処し、又はこれを併科する」といった非常に重い罰則を設けて、法令遵守の義務を課しています。法律が要求する「善管注意義務」をしっかりと果せる理事が必要なのです。とりわけ「新しき村」は大きな転換期にあります。将来的な寄付の増加の可能性のカギを握る公益認定を取らなければならぬという極めて大事な時期を迎えています。

今後の計画の中にも、村内・村外会員をはじめとする様々な提案を取り入れられるように論文募集などのアイデアが出ています。「新しき村」には様々な可能性がありますが、いずれも各種法律いろんな提案がでてくると思いますが、どの整合性を確認していかなければなりません。「新しき村」の中に建物一つ建てる場合でも許認可が必要なケース

もたくさん出てくるでしょう。また、提案にはヒト・モノ・カネがセットにならなければ実現の可能性はありません。とりわけヒトの問題は重要です。重い責任を担いながら、理事となって「新しき村」の運営を担える方々を我々評議員は選任していく責務があります。

法令遵守しながら実質面で地歩を固めていくためにも法律の専門家のもとに皆で一致団結して協力していくことが今必要な時だと考えます。

〈筆者プロフィール〉

出口 正之

サントリー文化財団主任研究員、ジョンズ・ホプキンス大学ファイランソロピール研究員・税制調査会特別委員・内閣府公益認定等委員会委員（第一期・第二期）。大阪府公益認定等委員会委員長。

公益財団法人助成財団センター理事長・公益財団法人公益事業支援協会大阪支部長。

国立民族学博物館および総合研究大学院大学名誉教授。「公益認定の判断基準と実務」「共感革命 フィランソロピールは進化する」「公益法人の活動と税制」「社会貢献のヒント」「ボランティア革命」等著書、論文多数



国立民族学博物館。同博物館は、大阪府吹田市の万博記念公園（日本万国博覧会の跡地利用でつくられた文化公園）の中心施設に在している。（Wikipedia より出典）



「公益認定の判断基準と実務」
出口正之 著
全国公益法人協会 発行

新しき村を公益法人とする手続(六) と「新しき村」を使つての広報活動



理事 千賀 修一

一 公益認定申請の手続の動き

当法人は、令和四年五月二七日に埼玉県に公益認定の申請をし、埼玉県からの質問に対し、九月二六日に全て回答し、その後一月八日付で九二項目にわたる内容についての質問があつたので、同年一月二七日回答しました。この回答で、埼玉県から昨年一月中旬又は遅くとも本年一月には公益認定がなされると思っていました。

ところが、本年一月一日埼玉県の担当者から、当法人が太陽光パネルを設置している土地の一部に農地(畑)がある。農地に太陽光パネルを設置する場合、農業委員会に届出て太陽光パネル設置の許可が必要であるところ、この届出がしていないと農地法違反となるので、公益認定申請の審査を進めるうえで農地法違反について確認する必要があるので農林部と話し合つてもらいたいとのメールが来ました。

そこで、県の農林部に連絡し、一月二四日理事長と私と倉敷理事三名が埼玉県川越農林振興センターへ行き事情を説明しました。

理事長から担当者に対し太陽光パネルを設置してから一年以上経過しており、農地に設置している土地の固定資産税を非農地である雑種地として支払つてきているので、現在の状態のまま認めてもらいたいとお願ひしました。これに対し担当者から固定資産税を非農地として支払つて来たからといって農地法違反が消えることはないので、農地法の許可申請を出してもらふ必要があるといわれました。更に農地法の許可申請を出してもらつても許可が出ない可能性が高く、許可が出ないときは撤去してもらふことになると言われました。

県から話を聞き、一月二九日理事会を開催し農地に設置されている太陽光パネルを撤去しないと公益認定手続が進まないで、できるだけ早期に撤去することを決議しました。

更に二月一日理事会を開催し、農地に設置されている太陽光パネルが八基(全体一七基)あることを確認し、八台分の撤去工事の見積りを取つたうえ、撤去工事を発注することを決議しました。この撤去工事を進めるためには、工事見積を取つたうえ発注する必要があるため、そのための手続を進めています。

二 「新しき村」の記事が朝日新聞の第一面に掲載

昨年一月二十九日朝日新聞東京本社さいたま総局西埼玉支局長の永沼仁さんが私の法律事務所に来て村を公益法人とする申請手続をした経緯と公益認定の見通しについて一時間位取材して帰られました。

私は、公益認定の経緯と現在の進行について説明し、新しき村は、新しき村の精神に賛同して多くの人が村内会員・外会員となつて一〇〇年以上運営継続してきた法人であり、日本の宝であると話しました。そして、一月十八日開催の評議員会で新しい事業計画と収支予算計画書が承認され、法人再建のスタートを切ることができ、近々公益認定される見通しであると話しました。今後については「新しき村」に掲載するのでそれを見て記事にして欲しいと話し、新しき村一月号を三冊送りました。そこで、記事の中に理事長が「失敗を恐れず前へ進めてゆきましょう。」という挨拶文があることを引用してあり、「新しき村」が機関誌としての役割を果たしていると思ひます。

三 「新しき村」を使つての広報活動

新しき村一月号は、印刷がきれいで読みやすくなり、新しき村の創立以来の歴史・実篤の名言等が多く掲載され法人の機関誌として充実した内容となつたので、「新しき村」を使つて以下のような広報活動をしています。

(一) 伊豆長岡の「実篤の宿いづみ荘」で販売

昨年度から調布市武者小路実篤記念館の売店で「新しき村」を販売してもらっています。本年一月号の売れ行きは、昨年度の新しき村より売れ行きは良いとのことでした。また、実篤が二〇数年にわたつて通つた宿で、「愛と死」その他多くの作品を執筆した伊豆長岡にある「実篤の宿いづみ荘」にお願ひして「新しき村」一月号から販売してもらうことになりました。

(二) フィットネスジム

フィットネスジムで顔を合わせる人八人の人に「新しき村」一月号を渡し新しき村のことを紹介しました。その中の神保正道さんから、妻の実家が新しき村の近くにあり、子供が小さいとき村に行つて卵や野菜を買つたり、村で遊んだことがあるので会員になるといわれ、早速夫婦で会員になってもらいました。

また、株式会社レノバ代表取締役・公益財団法人千本財団理事長千本俸生さんから「新しき村の理事として村の経営に当たつておられることを頂戴した冊子を拝読して感動を覚えました。村の人口が三人になっていることに驚いています。先生の素晴らしい活動が村の新たな成長に繋がることを祈っています。」というメールを下さり、大変励まされました。

(三) 早大の学生に紹介

私は、七年前から早稲田大学法学部に現代家族法の講座を寄付しています。本年一月一八日寄附講座の講師として授業したとき、講義の最後に受講生約二〇〇人を対象にしき村と実篤の生き方と名言を三つ紹介し、希望者一五名に「新しき村」一月号を贈呈しました。

新しき村と実篤の考え方を若い人に知ってもらうため来年以降も大学生に話すことを継続したいと思っています。

(四) 中央大学同窓会

二月四日に中央大学の同窓会である中央大学港白門会の総会に出席しました。このとき、中央大学の学長・前総長・前学長を始め多くの大学関係者と同窓生約七〇名が出席していたので、「新しき村」一月号を出席者全員に贈呈するとともに新しき村と実篤について紹介しました。

出席者の中から、前田速夫さんと大学時代からの友人である宇野茂彦さんから早速声がかかりました。宇野さんは中央大学元文学部長で、現在公益財団法人斯文会（史跡湯島聖堂）の理事長を務めておられ、現在も前田さんと交流があるとのことでした。また祖父が長野県から上京したとき実篤を訪問し絵を描いてもらったという人がおられ、新しき村に入会したいということ言われた人もいました。大学の同窓会で新しき村のことを紹介し、これを機会に入会

者が増えることが期待できると思います。

(五) 株式会社星河の入会

東京都品川区五反田駅前の土地約一万三千平方メートル（三、九三二坪）を再開発するという計画があり、昨年再開発準備組合が設立され、品川区と地権者との間でどのようなまちづくりをするかについて話し合いが進められています。再開発敷地内に私が顧問をしている株式会社星河がビルを所有しており同社の社長の野崎正史さんの依頼により準備組合の役員の集まりに出席しました。野崎正史さんは、公益財団法人の伏見記念財団の理事長をされ、公益活動に取り組んでおられる方です。

その席で「新しい村」一月号を役員に贈呈し、森ビルの森稔さんが実篤の「龍になれ雲目ずと来たる」という言葉を助けられて六本木ヒルズ他の都市再開発をしてきたことを話しました。役員の方々は、五反田駅前の都市再開発を進めるにあたって実篤の言葉を取り入れ、高い理想を掲げて進もうと役員一同の考えがまとまりました。その後、株式会社星河から賛助会員入会の申込を受けました。

(六) 高井法博会計事務所の入会

税理士法人TACT高井法博会計事務所は、グループ構成員一〇〇名以上の岐阜県最大の会計事務所グループで

す。同事務所の高井法博先生は、経営計画作成セミナーを四〇年間継続して開催し数多くの経営者が指導を受けており、私も指導を受けた教え子の一人です。

高井事務所は、二月二六日経営計画発表会を開催し、同発表会に招待されたので出席し、新しき村と実篤のことを紹介するとともに「新しき村」を出席者六〇人の方に贈呈しました。また日頃お世話になっている高井先生に「桃栗三年柿八年達磨は九年俺は一生 九十歳 実篤」という木版画を贈呈しました。この木版画は、高井グループが経営されている研修センターに飾られるとのことでした。そして、税理士法人TACT高井法博会計事務所に賛助会員になってもらいました。

(七) 岡本太郎記念財団

知行理事長から岡本太郎が実篤に頼んで絵を描いてもらったことがあると聞いたことがあり、公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団の役員会(私は設立時から監事)で「新しき村」一月号を配布して新しき村の話をしました。

同財団の理事の吉村絵美留さんは、知行さんの妹と中学校時代同級生でありまた吉村さんの姉が知行さんと同級生であることから、新しき村と実篤のことはよく知っているといわれました。

また、評議員の榎木野衣(多摩美術大学教授)さんは、

新しき村に行ったことがあり、村の美術館には素晴らしい作品があるので大切に管理をして欲しいと言われました。同財団の出席した役員一二名のうち二名の方から新しき村について話を聞くことができ驚きました。

(八) ライオンズクラブに対する広報

監事の大橋さんは四〇年前にライオンズクラブに入会して活動をされております。新しき村のことを地域の人に知ってもらうため入間地区にあるライオンズクラブを訪問し新しき村を紹介することを理事会に提案され理事会で賛成しました。そこで大橋さんは、二月末日までに西入間ライオンズクラブ、嵐山玉川ライオンズクラブを訪問し、これから越生ライオンズクラブ、日高ライオンズクラブを訪問する予定とのことでした。

大橋さんは、ライオンズクラブを訪問したとき、「新しき村」一月号と新しき村を紹介した朝日新聞の記事のコピーを出席者に配り、二〇分〜三〇分新しき村のことを話をされるとのことです。会に出席者した人から新しき村について理解し、新しき村の今後について提言する人がおられます。大橋さんの行動力に対し敬服するとともに、ライオンズクラブの会員の中から新しき村の理解者が増え入会者が出ることを期待しています。



の「新しき村」

は3人 年願う



野菜を収穫する「村外会員」の和田東市さんは毎日のように村に通う。後方は太陽光発電のパネル

白糠派の作家、武者小路実篤(1888-1976)が開いた理想郷「新しき村」が大きな転機を迎えている。100年を迎えて存続してきたものの、本郷地の「村民」は減り続け、今や8人。再生に向け、新たな挑戦が始まった。(森田)

埼玉県毛呂山町の丘陵地に、村はある。現在、40、50代の男性3人が暮らし、協力しながら無農産で米や菜を栽培している。

村の始まりは第1次世界大戦が終わった1918年。国内では米騒動があ

ざし寄付・アイデア募る

新しき村



「人間らしく生きる」「自己を去らす」といった武者小路実篤の理想のもとに開かれた農業共同体。埼玉県毛呂山町の本郷地(一部は坂戸市)の面積は約10ha。村で暮らす「村外会員」(3人)と、会費を支払って村を支える「村外会員」(約1600人)がいる。村外会員は生活費の負担がなく、毎月3万6千円の支給を受けられる。村内にある美術館は一般公開されている。

●「新しき村」の全景=2019年撮影、調布市武者小路実篤記念館提供●牛舎跡。村に長期滞在する小島真樹さんが昨年解体した。今年は簡易化した施設の解体をさらに進める予定だ

む。閉塞の低迷などで収入が減り、財政意図た。美観アップで、新たな入村者を招き寄せようと2010年に始め、太陽光発電が稼働に拍車をかけた。り、村を存続・発展させる事業のアイデアを募集し取り戻度が終わり、売電価格が大體に下がった。

運営法人の理事で、計画をまとめた

いろいろの。間口が広く、左右のイデオロギーを超えた理念だからこそ、村が100年以上続いてきたのではないのか。先細りだとはいえ尊敬に値する。対立の続く今の時代、再び見直されてもよい。農業を志す若者たちによって、埼玉だけに限らず、「のれん分け」のように広がっていく可能性もある。

二〇二三年二月一三日の夕刊第一面に掲載された「新しき村」の記事を転載します。



年末のもちつきには、村外から高校生たちも参加した。いずれも埼玉県川口市町

武者小路実篤

「村民」今 次の100

り、スペイン風気が流行していた。そんな不安定な時代に、実篤は仲間と高崎県の山間地を離脱した。一定の労働をすれば衣食住が立等に保証され、自由な余暇を過ごせる。そんな場をめざした。

ダム建設が決まり、39年に現在の場所に移す。当初、村外からの経済支援が欠けなかったが、戦後に始めた養蚕事業が成功し、58年に村の事業だけで生活費をまかなえるようになった。60、70年代には若者の入村や出産が相次ぎ、幼稚園もできた。人口は最盛期で60人を超えた。

その後は高齢化と村民の減少が進

衣食住保証の農業共同体 存続め

新理事長は実の孫

一部では「解散」もさやかれた。100周年を迎えた18年に8人だった村民は、70、80年代の1人が昨年まで、村を運営する一般財団法人の理事長も務めていた寺島洋さん(81)もその一人だ。村内で結婚し、約60年暮らし。愛着は強いが、村の立て直しを主導するときに限界を感じた。「新たな人たちにバトンタッチする時期だと感じ、決断しました」。

寺島さんに代わり、新理事長に就任したのは、村外で暮らす実篤の孫武者小路知行さん(76)だ。「僕もできない。何とかして存続させたい」と思った。

まず、税制上の優遇措置が薄い「公益財団法人」で村の運営を行うことを打ち出した。認可を受けると寄付が受けやすくなり、節税できる。昨年12月に決めた今年の予算では、公益財団法人への移行を前提に収入の柱に寄付金を増やした。約3千万円を目標とし、2千万円をクラウドファンディングで集めたいという。

資金が集まれば、来訪者が使うトイレを改修したり、空き家や農家を解体したり、老朽化する村の設備を整える

高校生ら「魅力的」

弁護士の千賀修一さん(78)は「新たな人材を呼び入れるために、時代の変化に合わせる必要がある。実篤の理念を継いできた村は日本の宝。積極的に『高校生ら』と就教込む」。

昨年暮れ、村の餅つきに、力強くおねを振り上げる高校生姿があった。村で収穫した米を長年取り寄せている、東京郊内の一家の息子と友人たちだ。「ホテルの舞踊班は魅力的」と話す若者たちと、村民、手伝いしてきた村外の人たちが、和やかなひとときを過ごした。

「村はこれまで、新しく開くろうとする人をうまく生かすことができなかった。若い人たちが受け入れ、雰囲気が変わっていくといい」。村で20年以上暮らし、米作りを担う小田切正雄さん(85)は語る。

村の危機を今回に限ったことではな

対立の続く時代 見直されてもよい

「新しき村」を2018年に訪ねた政治学者が掲げた理想主義は、近代的名誉を尊重しながら、自然と親しみ共に生きていこうと

が掲げた理想主義は、近代的名誉を尊重しながら、自然と親しみ共に生きていこうと

新しき村創立から

第二十二年（埼玉の東の村の開設二年目）

一九四〇年（昭和十五年）

（財団法人新しき村発行の「新しき村五十年」から転載）



野井十（左）と川島伝吉

伝吉、なお、劉子、精子、三郎、輝夫。野井一家は、十、ウタ子、篤節子、泰、秀子。日向は杉山家族。

○『年表』に『新年は荒壁の増田荘で祝され、その日、実篤は一世一代の大

字「和而不同」を

書いた』とある。この字の軸は、いまも時々『増田荘』の正面の壁に掲げられている。

○増田荘につづいて、控屋（六坪半）を建て増。
○よい井戸ができる。

正確には、東第一新しき村、略して東の村とよぶ。ひがしの村。ひんがしの村。歌言葉としてはひんがしの村など面白いと思う。

古い武蔵野の奥、秩父の麓近く、郵便物のあて名は埼玉県入間郡毛呂山町大字葛貫。もろやまちょう、つ

陸稲四反、甘
諸五畝、野菜三
畝がこの年の農
業だった。他に
梅林三畝があ
り、しゆろ、桃
苗など植え付
けた。山林地約九
反がふえ、秋に
はじめての収穫
祭もあった。

川島一家は、



写真：舞台付きの増田荘

づらぬきと読む。

東京市方面から東の村を訪ねるには、新宿から八王子を経て八高線で行くのもあるが、これは連絡が悪い。池袋から東上線の寄居ゆきに乗って一時間で坂戸駅乗換え、越生線のガソリンカーで二十四分、武州長瀬駅について下車。そこから山道を南へ歩むこと約二十五分、西方の秩父系の山の山裾がぼろのようにのびてきている幾筋ものうちの丘を越えてゆくと、松林の間か

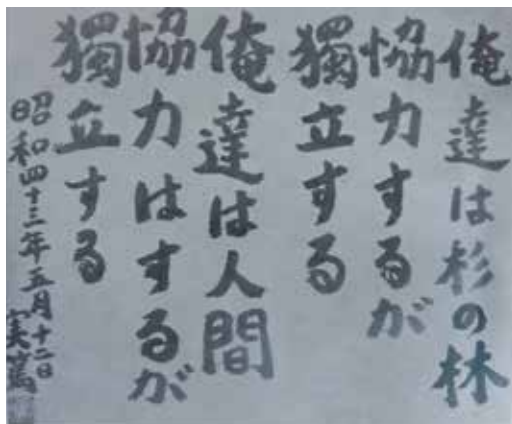
こんだものだ。これを七宝細工の徽章につくっても美しいものだと思う。

西から東へ章魚の足のようにのびた幾条かの低い長い丘の一つ一つに字名がついており、東の村は特別に毛呂山町と大家村の境界線にあたる所にあつて、その線に斜めに縦断されることになっている。その西北方の部分が毛呂山町大字葛貫字下中尾、他の一半は大家村字丸山という名になっている。

東の村の土地は初め東部鉄道会社の柴田稔さんや須藤さんという人達の骨折で、下中尾分に一町八畝八歩（実測一町三反歩弱）が得られた。昭和十四年八月だった。

当時、土地は一面に雑木のボヤボヤと生えた処で、伐り残しの若い檜があちこちに立っているだけだった。九月十六日に、先生その他の十何人かが此の地へ入ってきて少しばかり雑木を切り払い、かんたんな開拓初めの式をした。

当時、僕も野井もまだ池袋の奥の千川の畔に住んでいたのだが、その月の二十四日に野井が越生線東毛呂駅前に引きうつつて来、二十五日に僕も越生町の方へ越してきた。



ら田圃が見えて、そのむこうに増田荘の建物のある東の村が発見される。第四日曜等にはそこに新しき村旗がひるがえつていたりする。新しき村旗は稍長方形の青藍色の中に黄、黒、赤、白の四色をはめ

初めに道路の刈り払い、それが出来ると兎にも角にも雑木の切り払いにかかった。丘の上のまん中から切り初めたのはそのあたりでけしきを見ながら昼食などする関係もあった。

昼食するにも水もなかった。丘のふもとの少しこわれた処に、泉がある筈だときいたがちよつとさがした処ではわからないくらいだった。丁度ひでりのつづいた後のことで、ごく少ししみ出しているというくらいのもものなっていた。それでも水口へ竹の樋をあてたり、水のおちた処へ壺をうずめたりすると、よい水が汲めることになった。僕達はそれを汲んで運んで茶をつくりなどした。その焚火から立ちのぼる煙りは楽しかった。

そういう湯わかしや鉋や鎌の置き場もなかったわけで、夕方になると木の根方のいくらか夜露のしのげそうな処を見つけては集めておいたりした。

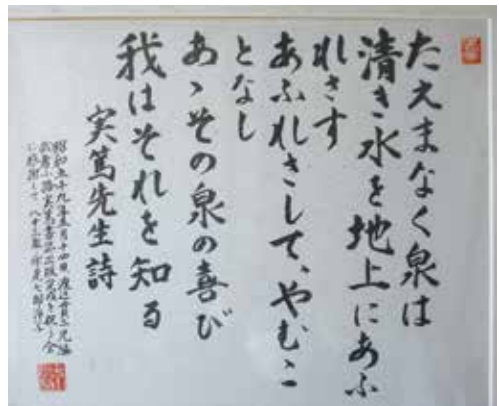
村上頼一君が岡山字の寄島から上京して来て、村へ来て僕らと起居を共にして十日ほど切払いに働いた。感激してよく泣いた。そしてよく働いたが、まもなく病身の母や淋しがっている妻子の待っている所へ帰ってゆかなければならなかった。

村上君が帰って

行ったのが十月の十一日で、同じ月の二十日には天幕形の東の村では最初の小さな建物が出来た。村上君の為に考えられたようなものであったのだが、その一部分には農具の入れ所なども附いている。

この建物が出来ると、僕と野井の生活は非常に楽しくなった。それをつくる為に働いてくれた市川さんという大工の人も頭のいい気持のいい人で、その友達の豊さんという人もいい人で僕らは楽しかった。

手早くつくられた小さな建物はバンガー式と呼ばれるものに近い様式なので、僕等はそれを村のバンガローと呼んだがそれができるとつづいて増田荘の建築が始まり、野井はその方へ働いた。僕は引きつづき雑木を切ることにかかり、先生や中川、前田君その他の





バンガロー

東京支部の人々もよくやってきては雑木の伐採に働いた。

十一月の二十六日、七日頃、増田荘の礎石が据えられた。同じ日位に栃木県佐野の人で二十七歳位の田沢堅司君というのがきて、以後十二月十日帰宅の途にくまで一緒に働いてくれた。この人は初めの二日は葛貫で、その後は毛呂で泊まっていた。どこか福永友治を思わせる処のある人だった。一緒に働きながら冬の

山の晴々しい暖かな夕をのぞんでは「気持ちがいいな」とくりかえして云っていたのを思い出す。

十二月も十日をすぎると、さすがに少しづつ寒くなった。

寒い風が吹くようになった。十三日荒壁の内側だけぬられた。その夜は僕は上京して留守だったが、野井は二人の大工と左官屋の家の者らと一晩中焚火した。それでぬりたての壁の氷るのをふせぐことができたのだった。

昭和十五年の正月は、東の村の最初の正月で此の荒壁の増田荘で祝されたのだった。その日、先生は一生一代の大字「和而不同」を揮毫された。(略)

(川島伝吉『東の村雑記』昭和十六年六月号『馬鈴薯』)
○三月、東京支部では、毎月第四日曜日に村を訪ねることにした。これは、昭和十九年六月、戦争で交通不能になるまでつづいた。

○『土地の為の会』ができた。『土地の値段は三百坪二百五十円位で買えるので、一円出せば一坪買えるわけで、皆で一坪でも二坪でも村に土地を寄附することは楽しいこと』であった。一口一円。

昭和十五年三月二十四日 晴

十一時二十五分長瀬駅着で先生が来られた。小国、江馬、中川、吉良さんが一緒だった。二時間ほどおくられて城米君もきた。この日、先生は日本画を描く用意をして来られ、七枚ほど描かれた。画材は村上さんから江馬がこずかかってきた。たくさんの水仙の根のいろいろ、村の中でみつけた春蘭等であった。

小国は二時頃帰り、先生は五時九分で帰られた。この日、中川が千葉の写真機をかりてきて撮影した。



四月二十八日

小雨

十一時半に長瀬へ出ると、江馬が一緒だった。他はこんな天気だったので、来ないで了ったらしい。この日、雨がときどきふる中で先生は外へ出では写真を

うつしたり、内へかえっては日本画を描かれなどした。

私は金目鯛の絵にお願いして字を書いていただいた。

五月二十六日 晴

長瀬駅へ出ると、ガソリンカーが来ても、先生はのっていないのでがっかりした。時間がありすぎるからと、東毛呂まできてみるとまだ十一時前で、なるほどとわかった。十一時二十五分、先生と中川と前田君とが来てくれた。昨日の雨が今日は晴れて、暑からず、すがすがしい心地よさだった。森を通る時、先生の絵の材料になる花をつみなどした。つつじ、さつき、他二つなど。

村へゆくと茶をこしらえて昼食をし、それから先生は絵にかかられた。さつきを同じ枝で二枚、白いプラプラする花のついた枝で二枚描かれた。この最後のが特によかった。野井と中川とはかいこんもした。中川は「今日は一坪やった」と云っていた。それを聞いた先生は「百人だと百坪出来るね」と云っておられた。この日は、野井の篤君もきていた。

六月二十三日 朝曇

十一時半、先生、江馬、中川、前田、外二人（前田君の友達）見えた。

村への道には、紫の夏枯草や白い野ばらが咲いている。そんなのをつんでみると、先生は今日は絵は描かないとのことだった。

村へつくと昼食にし、それがすむと、陸稲の除草にかかった。先生は一寸寝しておき出すと、写真を写しにかかられた。

日中は暑かったが、風は涼しかった。六時三十分長瀬発でひきあげた。

七月二十八日 晴

来村者中川一人。陸稲の草とりをしようかとかかったが、その前に一番大きい所ではもう穂が始めたのを、中川が見つけた。野井が西瓜を二個買って来たのを、後で一つ切って食べた。たべながら、先生その他へよせ書きなどした。

八月二十五日 晴

時間をはかって来村者の迎えに出ると、村の中で吉

良さんに逢った。長瀬駅で一時間近く待って、ガソリンカーがついて出てくるのを見ると、江馬と前田君とだった。中川は急にさしつかえたらしい。村への道にはおみなえし、桔梗、その他の秋草が咲いていた。村の中にはきのこが生えていた。食後しばらく無駄話をし、その後バンガローの前の広場つくりにかかった。

帰りは五時半、なすび、トマト、とうもろこしなど、みやげものが少しずつあった。前田君と江馬とは、二人で五十銭を、ただで持って帰ってはいやだと云って、置いて行った。

十月二十七日 晴

十一時半のカーを長瀬へ迎えに出ると、先生と中川と六歳の坊ちゃんをつれた宮川君だった。林の草の中には白い星のようなせんぶりの花が咲いており、これからの花りんどうもよい群青をみせ始めていた。

村へ来ると、やかんの湯も出来ていて、茶が出来たので昼食にした。さつまいもも、やがてふけた。昼食をゆっくりすまして、ほんの少し残っていた陸稲を、中川や先生や宮川君と一緒に刈った。今年、うどの軟化栽培をやる為にと、その準備の為につくった稲だった。

刈りあとの根が残っていて役立つのである。その稲を刈ってかたづけると、野井と中川とはさつまいもほりにかかった。

先生は宮川君とつれだって、ぐるりとひとまわりあるいておられた。僕らの働いているわきも通られた。後にこられて「座談会をやるうか」と云われた。それで皆をあつめて、足をあらったりすることになった。

座談は僕から始めて、野井、中川、宮川、最後に先生。かえりは四時半、先生達は村を出られ、僕と野井は少しおくれたが、長瀬へ出てみると先生達は見えない。森へとつかえすと、わかった。どんぐりをひろいながら、道をまちがえたのだった。その為に、一時間おくれることにはなつたが皆楽しそうだった。

(川島伝吉の日記・宇野幸子筆写)



寄付者名簿

小松崎 智

武者小路先生は、その長い生涯の中で、色々なことを企画し、実行された。そのうちで一番大きな事業は云うまでもなく、新しき村である。二十五歳の春、創刊された雑誌白樺の七年目の秋、大正六年九月公共白樺美術館建設計画を発表され、一青按針から寄付金を募られた。それはゴッホ・セザンヌ等西洋名画を購入

し、それらを常時鑑賞できる美術館を建てたいという趣旨で、柳宗悦、志賀直哉両氏と相談の上、決断されたのだ。



セザンヌ



ゴッホ

大正六年十月以降、九年十二月まで、趣旨書を読んで喜び、賛同し、一口一円以上の寄付金を贈って来た人々の住所氏名は、毎月雑誌の末尾に記載されている。いま、その人々の住所氏名を眺めると興味津津たるものがある。白樺は最盛期でも部数は三千ほどだったようであるが、十月以来、当初は白樺同人とその家族並びに親戚が、隗より始めよの言葉通り出資したが、号を追うに従って不特定多数の多彩なものになってゆ



高村光太郎



志賀直哉



柳宗悦



雑誌「白樺」



安倍能成



南薫造



西田幾太郎



高村智恵子



佐藤惣之助



芥川龍之介



中川一政



岸田劉生

く。大正六・七年当時、既に著名人となっていた人々の名は次の通りである。高村光太郎、同智恵子、西田幾太郎、柳敬助、南薫造、安倍能成、岸田劉生、中川一政、澤瀉久孝（国文学者）、神奈川県芥川龍之介、同神奈川県佐藤惣之助、東京岡本一平同かの子同安夫。島崎春樹（藤村の本名）等である。大正七年当時芥川は鎌倉に住んでいた。佐藤惣之助はいまだ三十歳前だが、詩人として一家を成していた。岡本安夫とあるのは一平一家にこの頃から昭和十四年まで、約二十年同居していた。本名恒松安夫の事らしい。氏は戦後三期島根県知事を勤めた。

寄付者の顔触れの多くは、無名の、併し前途有望



島崎藤村



岡本かの子



岡本一平



藤井達吉



村上華岳



児島善三郎

は一二名の例外を除くと、平均二十三・四歳であったと思われる。今戸精司、高村豊周、夫々彫刻家として名を成した。

つぎに多いのは、文学志望と思われる人々である。後年、詩、小説、評論、翻訳で一家を成した。何人か

な青年たちだ。美術雑誌の趣もあつただけ、美術青年も数多く寄付者の名を連ねている。小山新月、矢沢弦月、藤井達吉、村上華岳、安住安五郎、同ふくみ、濱田葆光、児島善三郎、裕真次郎、裕伊之助、高間惣七、横堀角次郎、林倭衛、宮田重雄、熊岡美彦、河野通勢、後年、美術評論家として知られるようになった面々は、富永惣一、上野直昭、板垣鷹穂、後藤禎二などがある。彼等の平均年齢

は大学教授として生涯を終わった人もいる。岡崎清一郎、網野菊、新城和一、菅忠雄、舟木重雄、木村修吉郎、尾崎喜八、片山敏彦、犬養健、清野暢一郎、小牧健夫、高橋元吉、大関五郎、岡野馨、鳴海完造という青森県人の名も載っている。この人は著書はないがロシア文学に関する収集本は見事なもので、無類の書病であつたという。中年以後は東京に住み、淡屋悠蔵とも交友があつた。足助素一、加納九郎という名もある。加納氏は学習院の同窓だ。正金銀行のロンドン支店時代、先生は再会した筈だ。晩年は長く千葉県知事をしていた。

寄付者中、最も多いのは、大正七年秋「新しき村」建設を敢行された際の新しき村の初期会員である。大正時代の新しき村の第一種、又は第二種会員の多くは雑誌白樺の購読者であつた。松本長十郎、長島直昭、村田永之助、児島榮二郎、原田孝太郎、後藤慎太郎、浅川巧、横井国三郎、石井徹郎、山本願弥太、直木憲一、久米利助、宮本正彦、川端信一、西島九州男、中村み



網野菊

さほ、小林多津衛、坂本万七、長岡忠三郎、垣沼（旧姓）隆三郎、利倉幸一、秋葉俊介。数えあげれば際限がないのでこの辺で打ち切ることにする。なお、神奈川県光路社同人五〇と記載されているのも全員新しき村の第二種会員である。加山四郎（画家）小泉松次郎（詩）秋元不二雄（俳句）小宮良太郎（短歌）本田幹（画家）などの数名が当時同人雑誌だったが、大正一四年某月、崖崩れで夫婦とも厭死したという。十五年友人が彼の詩集を編集、出版したが、序文を武者小路先生と千家元磨に頼んだという。残念ながらこの詩集は未だに見かけたことがない。

異色の人々は次の通りである。猪谷六合雄（日本スキー界の草分け）薩摩治郎八（神田の多額納税者）田中松太郎（日本美術印刷の父）河合卯之助（京都に住んでいた陶芸家）鹿見島寿蔵（歌人）谷川徹三（評論家）土井光知（英文学者）斉藤博（のちの駐米大使）小鹿野竹次郎（飯能の文芸愛好家、質屋で千家元磨と親交あり）青山民吉（美学者）青山二郎（その弟、陶器等美術一般の鑑定家）更に結城禮一郎という名もある。有名なジャーナリストでこの人の著述中、「旧新選組の結城無二三」を私は愛読した。武者小路先生も大正

末期刊行直後、著者から贈られ、面白く読まれたという。多数の寄付者中、特別、感慨深く思われたのは次の三名だった。

秀しげ子。この人は「心の花」などに短歌を発表していた。文学者との親交が多かったという。江口漁の「わが文学半世紀」によれば、芥川龍之介の死の原因の少なくとも三十パーセントを支配したのは彼女であると考えられている。歌誌「樹木」に昭和三十九年六月号から発表された。芥川文の「追想芥川龍之介」の中に亡夫と尋常でない関係があった。この人の姿が冷静に写されている。



秀しげ子



田中耕太郎

田中耕太郎。武者小路先生より五歳若い。父は明治の司法官で、東京帝国大学卒業後、内務省地方局市町村課に勤めたが、二年弱で東京帝国大学助教授に転じた。寄付した大正七年当時はその職にあった。彼が七十歳になった

年、日本経済新聞に「私の履歴書」を連載した。その中に、「白樺派の芸術運動に興味を持つようになった。とくにレンブラント、印象派、マティスなどに対する理解は白樺に負うている」とあった。先生と知友になったのは昭和二十年一月、外務省でひそかに始まった日本の終戦を考える学者文化人の集まりに出席してからであった。終戦後、文部省学校教育局長、吉田内閣の文部大臣となった。辞任後、参議院議員となり緑風会



マティスの作品

に所属した。昭和二十五年第二代最高裁判所長官となり任期十年に及んだ。このあと、オランダ、ヘーグにある国際司法裁判所判事となった。一身で立法、司法、行政の三分野で、最高位、又はそれに近い職にあったのは、空前である。なお、専門の国際法商法の業績により文化勲章を授けられた。昭和二十三年春、武者小路先生が主催者であった雑誌「心」が発刊された際、同人の一人に加えられた。八十三歳で逝去したが直ちに大勲位菊花大綬章を授けられた。その履歴は輝かしいもので、絶後と云っても過言ではない。

東京、小林中二口と大正八年四月号の寄付者名簿に誌されたこの人には、「追悼小林中」という分厚い本の中に次のように書かれた個所があった。筆者は藤森賢三、小林と同郷で元北海道電力副社長の職にあった。



小林中

「中さんは学校へはほとんど行かず(注、早稲田大学)朝寝坊ばかり、私が学校から帰って来てまだまだ布団の中に入っている。枕元には読みさ

しの夏目漱石や、当時一世を風靡していた文學雜誌「白樺」が転がっていた。」

早稲田大學中退し、故郷山梨県の石和銀行支配人から、根津嘉一郎の誘いに乗って、富国徴兵保健相互会社に入社した。昭和九年帝人事件に連座、投獄されたが、三年後無罪になり、富国徴兵保健の社長となった。終戦後東急社長となり次いで、初代日本開発銀行総裁となった。この頃から政界と密着、その活躍は怪物とも云われ政財界の裏面で隠然たる勢力を築いた。経団連会長の石坂泰三を財界表の総理大臣とすると、小林中は、財界裏の総理として戦後日本財界の屈指の人物と認められた。

白樺の企画の多くは、武者小路先生が主唱者であった。その一例の、この美術館建設の為の寄付者名簿を眺めると、実に絢爛である。購読者にいかにエリートが多かったか、その感化、影響力がいかに広汎であったか、今更に痛感される。日本人の趣味を高め、芸術に対する強い愛に目覚めさせた貢献は、後世の人間の感ずるより、はるかに同時代には強烈であったと考えられる。

近代日本の文学者中、最も大きな仕事をしたのは、



菊池寛

武者小路先生と菊池寛である。日本文化に更に幅広い、目に見えないが、大きな刺激を与えたのはこの二人の巨人である。その活動力の浸透を計り知ることは難しい。

然し、今日、最も論ぜられることが少ない文学者もこの二人である。それは人生経験の未熟な學生や學者に、手軽に論ぜられるには、その存在が大きすぎるからであろう。**〔新しき村〕一九九三年五月号から転載・写真は編集者が他の資料より転載)**

※佐藤惣之助氏は、川崎市市民ミュージアムより出典

※菊池寛氏は、文藝春秋オンラインより出典

※本文中の人物写真（佐藤惣之助氏と菊池寛氏を除く）と

「マティスの作品」は、wikipediaより出典

平野秀治さん追悼の言葉

昨年一二月に逝去された平野さんへの追悼文を掲載しました。

平野兄を偲んで



理事長 武者小路知行

一月二六日、前田速夫兄より、平野秀治兄の訃報の知らせが届きました。

実は、以前よりご本人から「かなり病が重く完治の見込みがない」ということは聞いてはいたのですが、お会いしたときにはいつもお元気な様子でしたので、まだまだ村の為に頑張っていただけものと思っていたのですが・・・。

村の衰退を憂いた平野兄が村を何と

かしたいので、是非力を貸してほしいと話があつてからの付き合いになります。そんな中でもっと直接的に村の為に働いて欲しい、出来れば理事になってくれないかと、ただ最初の頃は平野兄の個人的意見であり、当時は理事の増員や変更は考えられておらず、私も理事会や評議員会にオブザーバー的な形で出席はしていましたが、これまで直接に村の運営や仕事に関わってこなかったこともあつていま一つ踏ん切りが付かないこともあり、言葉を濁していたのですがそのうちに理事長にとお会いする度に言われるようになります、私もただ聞き流している訳にはいかなくなり、村の人を含め他の人にも受け入れてもらえるということとなり現在に至ったので、私が理事長の職についているのは平野兄のせいだと言えらると思います。

現在村は大きな転機を迎えています。平野兄の望みも汲みながら私達は前に進んで行こうと思っております。



日々新しき村主催の「新しき村創立101周年記念コンサート」(2019.10.28 銀座ヤマハホール於) 写真左から、平野秀治、千賀修一、武者小路知行、カレル・フィアラ、クヴィタ・ピリンスカ、石川静(村内で元理事長石川清明の長女。村内で生まれ、ヨーロッパ各地でクベリック・トリオとして活躍している。)、前田速夫

弔 辞



理事 千賀 修一

一般財団法人新しき村の評議員・公益財団法人アジア共生教育財団の理事の平野秀治さんの御霊前に、謹んで哀悼の意を捧げます。

昨年一二月一〇日、広い自宅土地の有効利用計画の相談をしたとのことでご自宅を訪問したときは、前向きな話をされ、帰りには歩いて相模大野駅まで送ってもらいました。

また、昨年一二月一八日開催された新しき村評議員会に出席され議決に参加されました。

平野さんとは、一二月に二回お会いしてお元気でしたので、奥様から計報

を受け、驚愕し悲嘆に暮れました。

平野さんとは平成三〇年五月私が前田速夫さんの「新しき村の百年」を読んで村外会員になった直後に知り合い、前田さんの呼びかけで武者小路実篤さんのお孫さんである知行さんを会長、前田さん、平野さんが副会長、私が会計担当ということで日々新しき村の会を立ち上げました。

日々新しき村の会は、会報の発行、コンサートの開催その他新しき村を活性化するための方策について研究し提案等々を前田さんと平野さんを中心に多くの村外会員の皆様の協力を得て精力的に進めました。

この日々新しき村の会の提案について新しき村の理事会は採用しないことになり、会としての活動を休むことになりました。

そこで平野さんに私が代表理事となった公益財団法人国際人財開発機構

の評議員・公益財団法人アジア共生教育財団の理事に就任してもらい助けられました。

特にコロナ禍の中で松戸の研修センターで平野さんと一緒に外国人技能実習生に対するガイダンスをして記念写真を撮ったことが昨日のように思い出されます。

一方、新しき村では、一昨年このままでは継続が困難であるとのことから村の財産を売って規模を縮小する再提案が検討されたとき、前田さんと平野さんと相談して日々新しき村の会として村の財産を減らさない方法で再建する案として公益法人化を提案しました。

平野さんは、この提案を理事会や村外会員の人にわかりやすく説明する資料を一生懸命作り、この資料を使って平野さんが説明した結果村の理事会は公益法人化の方向へ進むことを採用しました。

その結果、昨年三月の評議員会で武者小路知行さんと私が理事に選任され、知行さんが新しく理事長に選任されました。

それ以降新しき村は、新体制の下公益法人化の進められており、昨年五月埼玉県に対し公益認定の申請をし公益法人に認定されるまであと一歩のところに来ています。

平野さんと一緒に仕事をするようになって、平野さんは、新しき村のことをいつも思っていることがわかりました。平野さんから学生時代に村外会員になり実篤さんと何回もお会いしたことがあると聞いていましたので「新しき村」と「この道」の雑誌の中で手元にある最も古い本の中から平野さんの名前をさがしました。

この道昭和四五年八月号に住所変更として久留米市に変更・同四五年九月号に土地の為の会に寄付・同四六年四月号

に土地の為の会に寄付・同四六年七月号に住所を神戸市に変更・同四六年八月号に会費受領の欄に平野さんの名前があります。また、平成二〇年代の新しき村に多くのことを投稿されています。

これらのことから、平野さんは、学生時代に新しき村の村外会員になり、社会人になって二年目から村に対し寄付を始めたこと、それ以来村外会員となり、新しき村の精神を取り入れた生活を五〇年以上にわたって継続して来られたことがよくわかりました。

いつも穏やかな話し方で他人の意見を聞き、誰かの役に立ちたいと一生懸命になる生き方は、「人間が天命を全うし各個人の内に住む自我を完全に成長させることを理想とする。」という新しき村の精神に添った生き方でした。

新しき村は、平野さんの尽力により公益法人となり今後五〇年・一〇〇年継続できる村に成長できるようになります。

新しき村をこれから大きく成長させるために平野さんと共に色々話し合い、新事業に取り組みたいと思っておりますが、今後は平野さんの新しき村に対する熱い思いを新しき村の役員が引き継ぎ実現するよう努力することを誓います。

誠に心残りではありますが、平野さんとお別れするにあたり心から尊敬と感謝を捧げます。

どうぞ安らかにお休み下さい。

令和五年一月二六日

一般財団法人新しき村 理事

公益財団法人アジア共生教育財団 理事長

千賀 修一

心底「新しき村」を愛した人



村外会員 前田 速夫

平野秀治さんの訃報は、年が明けた本年一月十六日、山口道朗さんからのメールで知った。五日、鼠径ヘルニアの手術は無事終えたものの、その後も血液のがんが悪さをして、体力を奪い、同日午前十時五十一分、病院で息を引き取られたと、夫人からSNSをもらったことであつた。夫人へはすぐにお悔やみの電報を差し上げたが、あまりのことではまだに気持ちの整理がつかないでいる。

一月二十六日のお通夜には、「新しき村」からは武者小路知行理事長、千賀修一理事、虎ノ門法律事務所の内山英

治さん（「日々新しき村の会」事務局長）、鈴村洲太郎さん（「シニア総合サポートセンター」専務理事）、そして私が参列した。弔辞は千賀さん。「日々新しき村の会」での出会いに始まって、共に会報「日々新」を編集刊行したこと、近年は氏が理事長を務めるアジア共生教育財団の理事にも就任してもらったことなどを述べ、その誠実な人柄を讃えた。

通夜式の会場の隣の部屋には、平野さん所蔵の実篤書画、最新の「新しき村」一月号に寄稿した文章のページ、新潮文庫『愛と死』等が展示されていたが、ご自宅の敷地内に建設を予定していたという「市原豊太・江戸英雄記念『小さな仏文学館と白樺文学美術館』」の、当日書き上げたばかりの自筆設計図には、目頭が熱くなつた。

昨年十二月十八日、毛呂山の新しき村公会堂で開催された評議員会・会員大会に平野さんが車椅子で出席され、全員

にワープロで打ち出した用紙を配って、「現在の理事会では、理事会での決定事項として、評議員会では、報告・承認を求められますが、やはり、村内・村外の意見を取り入れてほしいです。たとえ、理事会の役割とおり進めても、何かおかしさを感じます」と訴えた結果、参加者全員の心が一つにまとまったことは、前号の拙稿に記し、そのことの意味と重要性も強調したので、ここでは繰り返さないけれど、私たちとしては、いまや文字通り遺言となつてしまつたこの言葉を実行していく以外に、平野さんに報いる道はない。

私と平野さんとは、「日々新しき村の会」の副会長同士で、新しき村が創立百周年を迎える前後から、山口さん、日比野英次さんらと共に、何十度となく熱心に再建案を語りあった仲であつた（ちなみに、私たちの会合場所は、平野さんが紹介してくれた新宿駅西口の甘味喫

茶店で、壁面はすべて実篤の色紙で飾られていた。知行さんに会長を、早稲田大学の先生に懸賞論文の審査をお願いしたときには同行したし、神奈川支部主催の創立百周年記念展覧会や銀座ヤマハ・ホールでの百一周年記念コンサートは、平野さんが主導した。

旧村内側が私たちの提案をことごとく無視し、拒むのに、私がしびれを切らしても、平野さんは常に穏やかで、村内の人たちに暖かだったし、知行さん、千賀さんとのあいだに入って、私たちとのあいだを調整し、繋いできてくれたのも、平野さんだった。平野さんがいなければ、早晚、私たちは空中分解していただろうとは、拙著『未完のユーピア 新生・新しき村のために』のあとがきに書いたとおりである。

村との融和を第一に考えていた私の弟の達夫は、村と私たちの板挟みになって、もう村のことには一切かかわりたく

ないと言つて降りてしまったのに、平野さんは最後まであきらめなかった。平野さんの新しき村に寄せる思いは、それほど純粹で、心の底から村を愛していたのであった。

千賀さんの努力で、村が無事公益財団法人の認定が得られたとして、その先には課題が山積している。急務なのは新生新しき村の組織づくり、定款・入村規定の改正、役員の刷新で、その粗案の一部を私は拙著に著したが、新役員は、それらについて、村内・村外の会員の意見を聴取し、自分たちの案を堂々と示すべきであろう（組織図、定款等については、近く本誌に私案を投稿の予定）。手続きや形式を整えることも大切だが、村は公益財団法人として何をするのか、その目的・使命・実現のための方法を、懸賞論文まかせにしているはいけない。参考にするのはいいけれど、私たち村内・村外の会員全員がめいめい主体的

に取り組み、汗をかくのでなくては意味がない。そして、いまもつとも大切なことは、何度も言うように、会員同士のコミュニケーションを活発にして、オール新しき村での再建を進めることであろう。

いま私は、平野さんの遺志を継いで、理事会に働きかけるには、亡き平野さんのかわりに同じ評議員に立候補するのも一案か（もちろん推されればの話だが）と、考え始めている。ついでに言えば、日向の村の松田省吾さんを理事に迎えることは、新しき村本来のあり方からして絶対欠かせないことも改めて強調しておきたい。

村内・村外の会員の拙著に対する感想、意見、提言の是非もお聞きしたいところで、私あてにメール(hayao17@outlook.com)をお寄せいただけると有難い。

「場」をつくる――

平野秀治さんの遺志



村外会員 日比野英次

二十数年前に村で生活していた頃、私は可能な限り村外会員との会合に参加するようにしていた。新村堂で毎週開かれる木曜会や仙川の公民館で春と秋に行われる記念祭などだ。神奈川支部の平野さんが木曜会に来られるのは稀であったが、新村堂での暮年会や新年会、そして年二回の記念祭には必ず出席されていたように思う。平野さんに最初にお会いしたのも、そうした会合の一つに違いないが、残念ながらよく覚えていない。他に在村中の記憶としては、神奈川支部主催の村の展覧会において

平野さんが陰で色々と骨を折られていた姿が印象深い。「この人は本当に村のことが好きなんだなあ」としみじみ感じたことが思い出される。

しかし、それだけのことであった。温厚で誠実で、村のことに熱心な人だとは思ったが、私は平野さんと「新しき村の理想」について熱く語り合うことはなかった。失礼を承知で言えば、私は平野さんに単なる「実篤ファン」もしくは「新しき村ファン」しか見ていなかったからだ。こうした「ファン」は村を深く愛しているかもしれないが、「村の理想」を実現するために村の現状をラディカルに変革することには無関心、と言うよりも激しい憎悪を以て抵抗するに違いない。私はそう思っていた。だから、平野さんとは通り一遍の挨拶程度のお付き合いしかできなかった。しかし、平野さんはそうした「ファン」などではなかった。そのことに気づいたのは不覚に

も私が離村した後であり、殊に平野さんの村に対する本当の思いを理解したのは新しき村創立百年を機に結成された「日々新しき村の会」を通じてであった。

さて、私の平野さんに対する印象を一言で表現すれば、それは宮澤賢治の「雨ニモマケズ」に出てくる「デクノボー」だ。「デクノボー」と言われて怒り出す人もいるかもしれないが、本当に心から村の将来を心配してオロオロしてきた平野さんには「サウイフモノニワタシハナリタイ」と人に思わせる何かがあった。その静かな迫力が平野さんを単なる「ファン」以上の存在にしたのだと私は思う。それは平野さんが平穩無事な「古きよき村」の幻影に囚われることなく、終生「新しき村の理想」を問い続けていたことを意味する。結果的に晩年の数年間に限られたが、私は平野さんと「新しき村の理想」について真摯に語り合え

たことを嬉しく思う。言うまでもなく、「新しき村の理想」を実現する運動は今始まったばかりだが、平野さんの遺志は間違いなくそこに生きています。それは、人間が本当に人間らしく生きられる「場」をつくる、ということに他ならない。

振り返ってみれば、「新しき村」の変革運動は熱心な「ファン」との闘いだったと言える。勿論、「ファン」もまた村に「場」を求めていることには変わりはない。しかし、先述したように、それは平穩無事な「古きよき村」の幻影にすぎない。私はそれを「毛呂山イデオロギー」と称しているが、我々は「古き場」を超えて「新しき場」をつくらねばならない。ここで「古き場」と「新しき場」の差異、そして「新しき場」の具体相について述べることは自重するが、異質なものを排除する「閉じられた場」ではなく、多様な人間がそれぞれの理想の花を咲

かせる「開かれた場」の実現こそ平野さんの遺志だと私は信じている。ただし、そうは言っても、そのような「新しき場」が容易に実現できる道理はない。むしろ、「古き場」に執著する人の思いには実に根強いものがある。その現実を誰よりもよく理解していたのも平野さんだった。それ故、平野さんは「古き場」を愛する者とならぬ「新しき場」以外は眼中にない者との間に積極的にならんとされた。実際、平野さんがいなければ、「日々新しき村の会」は疾の昔に空中分解し、村そのものが終焉していただろう。その意味においても、平野さんという「デクノボー」は村にとって掛け替えのない存在だったと今更ながら思わずにはいられない。

最後に、一つだけ訂正をしておきたいと思う。それは、前田速夫さんの新著『未完のユートピア―新生・新しき村のたぬ』の中でも言及されている私の「毛

呂山の無血開城」という架空シナリオの配役についてだ。臆面もなく私は自身に坂本龍馬の役を配し、平野さんには伊藤博文を配した。しかし、よくよく考えてみれば、平野さんこそ坂本龍馬の役に相応しいのではないか。不可能と思われた薩長同盟を実現した龍馬の粘り強さほど平野さんを彷彿とさせるものはないからだ。もし龍馬が生きていたら、明治維新も青山半蔵が嘆くようなことにはならなかったに違いない。そのような後悔を「新しき村」の将来に繰り返さないためにも、平野さんの遺志をしっかりと継承していきたいと思う。

「新しき村」の夜明けは近い。

平野さん追悼



村外会員 北村 雅美

思い返すと、平成三十年の四月だった。神奈川支部は新しき村の百周年記念に、展覧会を早くから企画していて、既にその秋の一〇月に、会場は鎌倉芸術館のギャラリーで開催されることが決まり、そろそろ具体的な準備を考える時期でもあった。そんな時、村の行事の帰り道、私は車で来ていた平野さんに途中まで乗せて行ってもらうことになった。車中の話は専ら展覧会のことだった。今回の展覧会は主に神奈川支部のメンバーの所蔵品によって行われる予定で、まだいろいろな状況を掴めていない時期でもあり、張り切る気

持ちと共にいろいろな不安な気持ちもよぎったりしていた。でも平野さんの話を聞くうちに、平野さんが本当は、もう一つ展覧会をやりたいと思っているのを感じた。それはなかなか難しいのではないかと思う私の気持も話したが、話すうちに候補の場所に私の地元の平塚美術館も入ると気が付き、また、一度で終るのはもつたいなと思う平野さんの熱意が、こちらにも伝わってくるような気がしていた。日頃私には寡黙の人という印象の平野さんの話が、心に入ってきたのだった。

それで、平野さんと話したその翌々日には、私は平塚美術館に足を運んでいた。平野さんの気持を聞いた以上、とりあえず出来ることをやってみようと思った。神奈川支部のメンバーにも相談せずまず出かけたのは、断られる予測の方がずっと大きかったからだったと思う。案の定、美術館の利用申請の係に相

談すると、予約の受付が完了してしまっていて今年度はもう空いている日にちは残っていないと思うと言われた。私が予測していた返事だったけれど、思いがけないことに、話を聞いていた別の担当者が「いや、確か前半に何か所残っている所があったと思う。」と言われ、何人かの人が調べてくれた。七夕祭りの最中の週ということも有ったのか、そこだけぽつんと、忘れられていた六日間が現れたのだった。

それから、私はあわてて久保さんや岸田さんに、もちろん平野さんにも事情を話し、一〇月の前にも展覧会を平塚で開催することはできないだろうかかと相談した。急遽支部メンバーが平塚美術館に集合し、ギャラリーの状態を確認。平塚展の開催を決めた。私にはこのような成り行きも自然に受け止めて実行して貰える神奈川支部の仲間の優しさが嬉しかった。振り返ればあの平塚展は

平野さんの車に乗せて貰って、平野さんの熱い想いを聞くことがなかったら、実現しなかったかもしれない。大変だったけれど、大切な良い思い出になった展覧会だった。そしてまた、展覧会の準備が始まると、平野さんの収集所蔵する武者小路先生関連の作品の多さにも驚くことになった。平野さんの村への愛情の深さというようなものを、私はその時感じていた。

その後、コロナの影響で神奈川支部の会が開かれることもなく、月日が過ぎていった。

そして、突然昨年の一二月号に『余命宣言を受けて』という平野さんの文章を眼にした。余命宣告って平野さんは何のことを言っているのだろう。解せない気持ちで本文を読んでもう真底驚いた。お元気に過ごされていると思込んでいたので、その唐突な出来事にどうしてよいかわからなかった。あわて

て平野さんに手紙を書いたけれど、それはただ自分の為に書いたような手紙だったと思う。そして一月号には、昨年一月一日に開かれた評議員会に車椅子で出席されたという平野さんが集合写真に写っていた。車椅子でなくては参加できなかったというのは病状が進んでいることかと心配になったが、間もなく追いかけるようにして訃報をお聞きすることとなってしまった。

私と平野さんは、三〇年以上も、神奈川支部の仲間として歩みを共にしてきました。そしていつのまにか、困った時はきつと助けてくれる信頼できるメンバーになっていった。

『黙っていても通じる仲間ぞ楽しき』そんな武者小路先生の言葉を思い出している。私はあまり会う機会が無くて、平野さんという人を信頼できて安心していた。大切な仲間が逝ってしまった事実を、私はまだ受け止められずに

いる。



神奈川支部が平塚美術館で開催した「新しき村百周年記念―武者小路実篤と仲間たち展―」で:左から村外会員の久保義信、山口道朗、前田速夫、北村雅美、千賀修一、平野秀治

夢実現の途上で散った友を悼む



村外会員 山口 道朗

平野さんの突然の訃報は、今年一月十六日(月)十一時二十分付の奥様からのSNSでいただいた。「十時五十一分亡くなりました。詳しい事は後で連絡します」

おそらく病院で平野さんを看取られたあと、何はさておきご連絡を下さったのだらう。

奥様からは一月五日に平野さんが鼠径ヘルニアの手術をしたとお知らせいただいていた。

一月九日には、五日の手術は無事に終わったが、「血液の病気が悪さをしてあちこちを痛め悲鳴を上げ、体力を奪っ

ている。病院として全力を尽くす」という先生の言葉が記されており「平野(さん)の様子が変わって来たので、本人がどうしても開きかかった展示館(奥様の表現)の判断ができません。……山口(さん)にいろいろお願いしているようですが、計画をストップすることはできませんか?」との相談をいただいた。

展示館とは制作途上であった平野さん編纂の単行本「市原豊太・江戸英雄記念」『小さな仏文学館&白樺美術館(仮称)』を出版し、同時に「自宅の駐車場部分の土地を一部売却、その資金を元に自宅に隣接した文字通り『小さな仏文学館&白樺美術館(仮称)』を建設、ご自分の所蔵作品・資料を収蔵・展示する同名の法人を設立して地元地域の社会インフラの一助にしたいと計画していた「館」のことである。

私は本の資料作成と編集補助を依頼されていたが、設計や建設については

聞いていなかったこと、体調が回復基調にないことを考えれば延期ないし中止が妥当だろうと記した。

その日のうちに奥様から直接電話をいただき、五日の手術後より大分良くなった感じがするというお話を聞き、病状が安定してきたものと解釈して胸を撫でおろした。

わずか一週間後の十六日に訃報に接することになった。あまりの早逝に言葉もなかった。

いつも温厚で人に優しく、尖った部分の見えない印象から優柔不断なのだろうと思われがちだが、実は「一度決めると梃子でも動かさない」一面があるのだと奥様から教えられた。

『小さな仏文学館&白樺美術館(仮称)』設立計画もその証だったという。

二〇一八年七月に「新しき村」の村外会員有志により「日々新しき村の会」が創設された時には真っ先に賛成し、機

関誌『日々新』の編集人を務めた。

同年七月三日～八日に平塚市美術館
アートギャラリーで開催された「新し
き村百周年記念―武者小路実篤と仲間
たち展―」（第一期）、十月二十二日～
二十六日 於…鎌倉美術館（第二期）の
主催は「新しき村」神奈川支部であるが、
村の出品協力を受けられなかったため、
平野さんを含めた会員達が自ら所蔵す
る作品や資料を出品、会場設営から搬
入、展示、撤収まですべて自分達でや
り遂げた手作り展であった。

二〇一九年十月二十八日、新しき村
創立一〇一周年を記念した「クーパーリッ
ク・トリオ」（室内楽の国チェコの名門
トリオ）によるコンサートが「日々新
しき村の会」主催により銀座ヤマハホー
ルで開催され好評を博した。（ヴァイオ
リン演奏・石川静、チェコ在住）

音楽イベントの開催は専門的な知識
と作業が必要となる。平野さんはそれと

知らずに善意から率先して引き受けて
しまったのだが、実作業でトラブルが生
じ、私に協力を求めてきた。このイベ
ント克服を機に私と平野さんとの距離
が飛躍的に接近したように感じていた。
ある種圧倒的な信頼を寄せてくれた
ようであった。

「二〇二二年九月末に血液検査で血小
板が少ないとのことで精密検査で血液
のガンということが判明し、余命約二
年と宣告された。…昨年（二〇二一年）
の秋の評議員会で理事として打診され
たが、病気のこともあり引き受けること
は出来なかった。無念であった」とある。
余命宣告通りならまだ半年以上の時
間が残っていたはずであった。

昨年十二月十八日、毛呂山の新しき
村公会堂で開催された評議員会・会員
大会に平野さんが車イスで出席された。
自作のプリント配布のためだけに病を
押して参加したのだ。

「現在の理事会では、理事会での決定
事項として、評議員会では、報告・承認
を求められますが、やはり、村内・村外
の意見を取り入れてほしいです。たと
え、理事会の役割とおり進めても、何
かおかしさを感じます」とあった。

財団の役員と村外会員の立場の乖離
が大きく、私たちの間では解消すべき
事案として以前から指摘されていたこ
とである。

大会出席時にはすでに発声は難し
かっただろうと奥様から聞いたのは二
月上旬した際にご自宅に焼香にお伺い
した時であった。

晩年、病魔に蝕まれながら夢の実現
のために生命をすり減らし生き急いで
しまった平野さんの無念を想い、早逝
を悼む。

かけがえのない

日々を

渡辺 兼次郎

今年の夏はとても暑い日が続き、家内の病気によって、新しい電気製品は買うことができず、扇風機だけなので三十三度にもなり、それに昼間仕事をやろうとすると、家内がいやがるので、午後は休みのような形にして、出かけることが多くなった。それでも生活があるので、朝五時頃に起きて仕事をすませる生活でもある。

家内は十年前に膠原病になり、薬のせいかわ腰を痛め、化学物質過敏症になり、電気製品、食べものの他、あらゆる新しいものに反応して、胸が苦しいんだけど、今はやきものの仕事をしたなどと言われるのは、一番辛いこともある。もう十年も経つので、自分の方も家内の病気、日常生活に対応して馴れては来てもいて、それに自分はこのような状態になっても、ある時は腹

の立つ事はあっても、本人が一番辛いだろうからと、落ち込んだりする性格ではないので、普通のように生活は続けている。

膠原病になる前は、喘息持ちで、今までに病院に行く回数は百回以上になっていると思う。今も外へ出かけるときは車椅子が必要で、これもあたりまえになっている。

老々介護と言われている現実の世界では、本当にたくさんいろいろな事情を抱えている人達もいるのだと思います。

そして自分はもうじき八十三歳になろうとしているが、今までは、自分は老人だと思つたことはない。実感がなかったのである。これも多くの人にある思いではないのかと思つたりしてもいる。明日死ぬかもしれない生命であっても、この今を生き切るしかないのだとも思う。出来るだけ楽しくこの世を過ごしていきたいと思う。

二十歳代のときから禅の方に惹かれて、禅の方では二枚になるな、一枚で生きよと言われていた。二枚とは、自分はどうしてこんな目に遭うのだろうと、なぜこんな仕事をしなければならぬのかとか言う事で、一枚とはその仕事と一つになり集中していくことで、

この事をよく思う。

一休禪師のこの事も忘れられない。

一休禪師にある人が、「風ある時はどうしますか」と問われ、「風のまにまに流れて、ゆったり生きる」と、そして「風無き時はどうしますか」と問われ、一休禪師は「自分が風になって行く」と言われ、なぜかこの事が忘れられないので、自分が風になって行くというのは、いいなと思っている。こうでなくてはならないと思ひもする。

最近本屋で、鈴木大拙の「禪」という本を買い、その中で

「禪は、人に新しいものの見方、すなわち、人生の世界の真理を感得する新しい方法を教えることによって、意識の奥底に新たな活力の源を見出すことによって、そしてまた、人に完全と充足の感を与えることによって、これらを行うのである。言い換えると、禪は、人間の内的生命の全組織を解体精査して、これで全く夢想だにしなかった世界を開くことによって、これらの奇蹟を行うのである。これを復活と呼んでもよいのかも知れない。」

と書かれている。心惹かれる言葉でもある。自分は道元さんが好きで、惹かれ続けてもいて、道元さんは、

とても忘れられない言葉がある。

「山に入る時よりこのかたは一人に逢う一人もなきなり。ただ、山の活性の現状するのみなり」

「かなたにあるに似たれども而今なり」

「万法ともにわれにあらざる時節、まどいなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし」

わたしがこのちっぽけな自分を、自我意識を忘れてしまった時、この世界には迷いも悟りもなく、悟った仏もなく、衆生もなく、生も死もない、と言うことなのだと思う。道元さんに惹かれるのは、普通の仏教者にはない独特の生死感が思われ、道元さんが、思想家であると同時に哲学者であると言われる。普通の仏教者は、修行して悟りを開く、というのは本題のようになっているが、道元さんはあまりそのような事にこだわらずに、お釈迦様は、全ては苦であると言うのも仏教本質ではあるが、道元さんは、苦しいときは苦しむしかない、悩むときは悩むしかない、迷うときは迷えばよい、悲しいときは悲しむしかない、死ぬときは死ぬしかない、と言っているように思う。この中に生きるこの世の救いがあるように思われる。悟りも迷いも同じという世界。

今の世の中を思うと、人災、天災と、何やらなかなか

か先を明るくするようなことがさらに少なくなってきたかとも思う。このまま経済中心に進むと、あまり明るさの見えない世界に進んでしまうように思われる。人間の事を思うと、人間は素晴らしいというのも本当、人間はどうしようもないというのも本当のように思われる。こうすれば、平和になると簡単にわかるのにそれができない世界、各国の都合の良いようにするため、何か突っ張りあってがんじがらめになって、なかなか良い方に進まないのはなぜなのか、人類を生み出した何者かの失敗した側面があるのか。

それでも、そういう中で生きなければならぬ。春の蛙の声を楽しみ、夏の蟬の声に懐かしい思いをして、秋はコオロギの声に何やら愛おしいような思いになり、風の音に静かに微笑し、青空や雲の姿に、夕焼けの美しさに、永遠を感じたりもする。秋の夜の庭に立つと、月が雲間に輝いていて、そして柔らかな風が吹いている、さらに虫の声がしきりに鳴いていて、自分は非常に充足した気分になり、この今に生きていることは素晴らしいと思いを深くする。

自分は若い時からいろんなことに出逢ったが、落ち込むことはない方なので、それにあまり優れた面のない方だけでも、今まで陶器づくりの仕事に出逢い、こ

の五十年の間に、おそらく、十数万点は買っていたことになるとは、主に新しき村の中に居た時がピークで、離村して十年は良かったが、それは家の払いのために使い。さあこれからというときに大震災になり、落ち込み、さらにこの三年のコロナのため、震災前を百とすると、今はその三分の一に落ち込み、まだ今秋も、二番目に売れる場所でも何日か前に、コロナのために中止の連絡があったばかり。道元さんの言う通り、困ったときは困るしかないと腹を決めてはいるが。

八十二年の年月を思うと恵まれていることを思う。息子二人はとても協力的で、何の問題も起こさず立派に生きて来ている。陶器を買っていたけど多くの人達にも感謝を忘れずに、今は家内の三度三度の食事の用意や、風呂入れなど日常の作業やさまざま世話も、これも何かだと思いつく一枚の心を持ち、自然を味わいながら、永遠のふるさとに帰る時まで、かけがいのない日々を生きていきたいと思う。一人で車を運転するときはモーターアルバートの音楽ばかりを聴いている。

武者小路実篤著

『釈迦』を読む

小島 真樹

村外会員の中野世津子さんが、近作の小説『雲下』を送ってくれた。一読した。傑作だと思った。もしわたしが文芸春秋社の担当社員だったら、芥川賞の最終審査にノミネート（推薦）すると思つた。

カピラ国の王子の愛馬が語る、若き釈迦の出家する迄の物語だ。美しい文章で釈迦の成長が丁寧な語られている。わたしは実篤に『釈迦』という作品があることを思い出し、読んでみた（半世紀ぶり）。やはり名作、傑作だった。

実篤は釈迦、キリスト、孔子の三人を人類最高の導師として尊敬している。そして伝記を書いている。

新しき村を創設した頃は、彼は最もキリスト教に近づいた時と言ってよく、現実には、日向の村で生活している時に『耶蘇（やそ）』を書いている。因みにキリス

トが十字架にかかって死んだのは三十三歳だった。実篤が日向の村を建設したのも三十三歳である。そして後年、『論語』を通して孔子の伝記も書いている。「論語私感」という図書は、数百冊にのぼる実篤の作品中の名著のひとつでもある。わたしは『論語』の解説書を数冊読んでいるが、その中でも最も力強く、説得力のある論語の参考書だ。

実篤著の伝記といえば『二宮尊徳』『大石良雄』『幸田露伴』その他があるが、その中でも『二宮尊徳』と『釈迦』がともに百刷を超え、まさにベストセラーになった。そして両方とも文学作品として名作だ。

話は横道にそれるが、『二宮尊徳』について。尊徳のことを知りたいという人に、わたしが勧めるのは、内村鑑三の『代表的日本人』の中の『二宮尊徳』である。短編であることと、一般に印象づけられている勤勉で経済通の人という理解だけではなく、尊徳の真価が分かりやすく書かれている。しかし短いということもあり、掘り下げは十分とは言えない。そのてん実篤の『二宮尊徳』は、実篤の強い尊敬の念が込められているだけでなく、近代の研究者たちの著書もふまえ、著述しているの、大いに推薦できる。

そういう宗教家や学者の最新の研究を読んだ上で書

かかっている点では『釈迦』も同じである。それは実篤みずから「後書」と称して参考文献を挙げていて、岩波文庫では解説の石井公成氏が詳細に語っている。更に本文中でも正直に苦勞を語っている。そうして書かれたのが『釈迦』である。

実篤によると「釈迦のことを知りたいと思う人に最初に読むことをすすめられる本」を書きたかったと。そして「伝統の仏陀」ではなく、人間、我等と同じ人間として仏陀を書きたかったと強調している。この点、十分に成功していると言える。

現在のわたしが強く示唆を与えられた箇所を書きぬいてみる。

仏陀は正しいと思うことを行つて誤解を恐れる男ではなかった。真理だけが彼を支配した。(中略) 仏陀が他の非難でこの大事な確信をゆるがすわけにはゆかない。

言う者には言わしておくだけだ。

仏陀は偈(げ)で答えて説得した。

「知恵なるものに怒なし、怒なき者など怒るべき。伏しがたきに伏すものは、寂靜の水平(たいら)かによし吹くとも、心の中に波は立たず。」

怒に怒をもって報いるは、げに愚かものの仕業なり少年賓耆迦(びんじか)、遂に降参して言った。

「私(わたくし)は馬鹿でした。どうかお許し下さい。」

仏陀はもつとも円満な人間である。人情を歪(いびつ)にされた方ではなかった。思いやりのゆきわたった方だ。

「……身体をたもつために食事をするので、美食を求めてはいけない。欲望に打ち負けるが故に生死の境に煩惱することになるのだ。」

「阿難、如来のために姿(しゃ)羅(ら)双樹(そうじゆ)の間に床を設けて、頭を北にして西に向いて寝られるようにおいてくれ。私の教えは北に弘(ひろ)まるだろう。」

こうおっしゃって右脇を下にして師子王のように足を重ねて寝られた。

「小さいことにこだわったりやかましく言わないがいい。人は過ちを犯さないことは難しいから、それは懺悔すれば許しあわなければならぬ。」

「お前達比丘、もし人が来てお前達を傷つけても、忍耐して怒ったり恨（うら）んだりしてはいけない。（中略）忍の徳は大で、持戒（じかい）苦行（くぎょう）も及ばない程だ。よく忍を行うものは有力の大人（だいにん）と名づけることが出来る。悪罵の毒を歓喜して忍受すること甘露をのむように出来ないものは、入道智慧の人とは言えない。

怒の害は諸々の善法を破る。猛火よりもその害は甚（はなはだ）しいものだ。功德を却（かす）むる賊は怒より劇しいのではない。在家の人ですら、怒は抑えなければならぬ。

すべての人が涅槃に入り得る時、仏陀の教えが完成した時であり、同時に人類が完成した時であろう。

満足した、円満な姿、心のこりなく、思いのこすことなき姿こそ、

我等の理想の姿であろう。

仏陀は、実に人類の導師である！

尾道にて（十一）

後藤 良雄

直哉居に近き老桜咲き初むる
吾妹子を育みし街桜咲く
細道を中に土塀の恋の猫
青空の底に落花の吸ひこまれ
鐘の音の呼び合ふ夕べ桜散る
だるま絵の視線鋭く窓若葉
広島がヒロシマとなる原爆忌
微動だにせぬ蜘蛛のゐて日の暮るる
はるばると来て白夜なりバルト海
菊の香や使ひ古せし住所録
合掌の屋根押し上げてすすきの穂
残照の尾道水道冬隣
語呂のよき車ナンバー冬日向
木枯や「売物件」の家多し
追憶のポーズの芙美子石路の花

空気神社

小林 雅司

ある日、部屋の本棚をなにげなく眺めていたら、古びた「ビートルズ・エイティ」という一冊の本が目に入り、手に取ってみた。その本は昭和五十四年の発行で、彼らの数多くのスナップ写真とともに、八十曲の音譜などが載っている。そこには色褪せたプリントが何枚か挟まれている。その中に「イマジン」があった。私はプリントの事をまったく忘れていたので、少し驚いた。

そのプリントは、うちの娘が中三の時、英語の教師から教材として渡されたもので、英語の歌詞と、その和訳が印刷されている。その教師は授業の時、ギターを弾きながらビートルズの曲を歌い、英語を教えていったようだ。生徒達にも、このようなやり方はとても好評であったらしい。後に娘は、中国・深圳で日本語教師をやる事になるのだが、その時この音楽的教育を取り入れたのだった。そこで使った教材の編集されたCDには、谷村新司の「昴」や「天空の城ラピュタ」のテーマ曲、テレサ・テン「時の流れに身をまかせ」、「北国の春」などの曲が入っていた。

ジョンとヨーコの合作であるこの「イマジン」という曲は、アメリカでの同時多発テロの時など、悲惨な事件が起きる度に、その周囲の人々に歌われてきたようだ。私はこの曲の歌詞を、今迄じっくり読んではいなかった。ロシアによるウクライナ侵攻の事もあり、改めて歌詞を目で追ってゆく。すると、ああ、こんな内容だったのかと、じわりと引き込まれていった。それは、「新しき村の精神」と、かなり似ているなど、感じられた。少々長くなってしまいうが、ここにその歌詞の全文を書き写してみたと思う。

天国というものは無いと想像しな

むつかしいことではないよ

同様に、地獄というものも無いと

僕等の上には空があるだけ

その下でみんなが

日々暮らしているにすぎないのだと

国というものは無いと想像しな

できないことではないよ

殺す名目も犠牲になる名目も無いのだと

それに宗教というものも無いのだと

ただ、人間が

平和に暮らしているだけだと

僕の事を夢想家だと言うのかな

でもこう考えているのは僕一人ではない

いつの日かあなたも分かってくれたらな

そうしたら世界は一つなんだけどな

所有というものは無いと想像しな

あなたにはできるかな

ガツガツすべき事はなにも無いと

人はみな兄弟だと

みんなが分かち合い

助け合っていくのだと

僕のことを夢想家だと言うのかな

でもこう考えているのは僕一人ではない

いつの日かあなたも分かってくれたらな

そうしたら皆が一体なんだけどな

この歌詞を写経のように書き進めていって、私は、これ

は祈り(・)なのだな、と感じてしまった。「新しき村の精神」

にも、祈る(・)という箇所がある。イマジン(・)の第二章に、「宗教」という文字がある。これについては、もう少し慎重に扱った方が良いかもしれない。

批評家の若松英輔氏が、Eテレ「こころの時代」という番組で述べていたものを、ここに紹介したい。「世界には、人の手の指のようにさまざまな宗教があるが、それらの元には、手の平という共通の土台がある。だから、各宗教の本質は同様のものであり、また、指の如く、それぞれ枝分かれしている事が良いのだ」と。そして氏は、旧約聖書の中に記されている伝道の書に言及してゆく。ダビデの子、エルサレムの王である伝道者(コヘレト)の言葉として、このような事が書かれている、と。

「空(くう)の空、空の空、いつさいは空である」

私は、空(・)という文字は、仏典のみに存在するものとはかり思っていたので、これにはハツとさせられた。氏によると、他の代表的な宗教にも空(・)という要素が見られるとの事。そういえば、ゼロを発見したのはインド人と言われているので、ヒンズー教の中に空(・)の観念が在るというのもおかしくない。

イマジンの第一章には、「僕等の上には空があるだけ」という箇所が見られる。ここを目にした時、私の脳裏に「空

「空気神社」という四文字が浮かんだ。かつて私が勤めていた金属会社では、ある時、ちよつと変わった工事物件が舞い込んだ。それは、山形県朝日町の山の中に、ステンレス（鏡面）で「空気神社」を造る、というものだった。私は会社のアトリエで、美術造形の仕事に追いまくられていて、別棟の工場で製作されていたそのものは見ていない。ただ、工場の人達が、このような仕事をしていると話していたので、「空気神社」という名に強い印象を受けた。

この原稿を書き進めてゆくに従い、次第にこの神社の事が気になり出し、妻のスマホで調べてもらった（こちらはケータイを持っていないので）。そのホームページによると、それは今から三十二年前に設置されたとの事。ステンレス（鏡面）製で、大きさは五メートル四方。社（やしろ）も鳥居も何も無く、ただ金属板だけが地面に置かれている。鏡面には、空や雲、周囲の樹木、のぞき込んだ人の顔などが映し出される。神楽殿として、各種のイベントや、パフォーマンス等に使えるそうだ。ステンレス板の下には地下空間があり、大きな瓶（かめ）が十二個置かれている。このあたり、能舞台の造りに似ていて、音響効果が期待できる。この地下神殿の写真が何とも神秘的で、なかなか良かった。コンセプトとしては、昔の中国の思想、五行（木、火、

土、金（こん）、水）の働きを包容し、この世に生きるものの生命を保持し、形成を促すのが空気（・）である、との事。それでこのような、現代彫刻風モニュメントと、能舞台、神楽殿がひとつになったものを作ったらしい。山形というと、有名な出羽三山信仰があり、修験道には、祖霊山岳信仰、神道、陰陽道、仏教、道教などが入り混じっているというから、このあたりも、観念の背景にあるのかもしれない。

この山形の「神社」を見て、私も我が家の庭に空気（・）神社（・）を作ってみたくなった。幸い家には、五十センチ四方で、腰高三センチ程の、丈夫なステンレス（鏡面）板があった。それは金属会社の廃材置場に捨てられたもので、許可を得てもらって来た部材だった。私は家の敷地内を歩き廻り、特に神聖な趣を有する所を選定した。そこは、工場のすぐ前で、キンモクセイの木の根元にあった。

作業にとりかかる。まず土を掘り、プラスチックの漬物用樽（たる）を埋め土台とする。その中央に、やや固めのウレタン製直方体を置く。この立体の天辺は、樽の縁よりやや高いので、ステンレス板を乗せると板が少し浮いた形になる。風が吹くと、かすかに揺れる。金属板をバチなどで叩いた時、音を響かせるには、土台との接点がなるべく小さい方が良いのかなと考えて、このような構造にしたの

だった。そして、激しい雨の時、本体に土が跳ね返らないように、周囲に蒲鋒型の古瓦を置いてみた。

あらためて、ゆつくりと完成したオブジェを眺めてみる。

鏡面には回りの景色が映り込み、新たな聖域が誕生したようだ。木製の球に布をまき、柄を付け、手頃なバチを作る。それを振り下ろし、音を出してみた。韓国の四人組の打楽器奏者・サムルノリ（・・・）が使っていた銅鑼（どら）のそれに似ていた。毛呂山町からほど近い、日高・高麗（こま）神社境内での彼等のコンサートを、つい思い出してしまった。もうあれから三十年以上時が過ぎていようだが、彼等が着ていた色鮮やかな民族衣装とともに、圧倒的迫力の音の奔流が、我が心のうちに蘇ってきたのだった。

今、大型台風十四号の嵐が、ここ熊谷にも到来し、雨風が吹き荒れている。庭のステンレス製神器（・・・）は、強烈な風に揺るがされている。大きな雨粒も、狂ったように次々に叩きつけている。そこに誕生した同心円状の波紋は生滅をくり返し、あたり一面、ことごとく、両界マンダラの世界に変貌させていった。

俳句

窓開けて

佐藤 ミツ

蕾はや人恋ふ都忘れかな

窓開けて見ゆる限りを小提灯

姉の住む羽後路の果ての山笑ふ

晩愛に迷ふことなし春怒涛

短か夜を止まらぬ雨の桜桃忌

近頃考えること

中村 隆夫

小島真樹兄へ

一人雑誌「草」をいつも届けてくださり有難うございます。それと、何度か竹の子を頂いたこともありました。私は仕事で留守が多く、一度もお会いしてお礼を言う事ができませんでした。お礼の電話をともしましたが、ためらいました。私は新しき村を離村したあと、村には迷惑をかけたような気がして、村には顔向けができない気持ち根底にあるのです。村を訪問することも憚られ、村の方々とも、お会いすることがありませんでした。そして小島兄へのお礼もためらってしまいました。しかし感謝しているのは事実です。失礼かとも思いますが、紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

思えば十年ほど前、一度お会いしましたが、会話をした覚えがありません。樋山兄、倉田兄、と恒例の飲み会をした時、渡辺梨花さんと、小島兄が特別に参加してくれました。梨花さんとの話が弾み、小島兄とは会話がなまお別れしました。私には、小島兄が気難しい方で、私のことを認めていない方、という印象が残りました。それもお礼の連絡をしなかった理由の一つです。

九月号の「草」を読み、小島兄に知己を感じました。以前から、小島兄の文章には同感することが多かったのですが、今回は私が考えていた事とぴたり一致したのです。それは「君は君、我は我なり、されど仲良き」という言葉が新しき村の、また人類の理想であるということとです。もう一つ追加すると「山と山とが讃嘆し合うように、人と人とが讃嘆し合いたいものだ」という言葉です。ともに先生の言葉で、私が好きな言葉です。

人と人とが尊重し合う。それがいかに大切な事か、そして自分を大切にし、自分の天命を全うする。それが新しき村の精神だと、改めて実感することができました。

戦争

最近の世界の不安定さを考えると、新しき村の理想とかけ離れていく世界を痛感します。国と国とがお互いに尊重すれば戦争は起きないはずで、人と人とが尊重し合えば争いは起きず、ネット上に飛び交う罵詈雑言もないはずで、人を尊重するということは勿論人の命を尊重するという事です。人の命が何より大切です。誰も死にたい人はいないはずで、国の権力者も自分が戦場に行くのであれば戦争を仕掛けないはずで、戦争は人の命を失うことで悪なのです。

なぜ戦争が起きるのか、国益のためと称する戦争、また、宗教戦争や、イデオロギーの違いによる戦争もあります。また戦争の原因に面子(めんつ)というものがあります。意地といってもよいかもしれませんが、「ここ」で退くわけにはいかない」とか「馬鹿にされて黙ってられない」とかです。一部の支配者の欲望や面子のための戦争は許されてはいけません。国益のためといって、国民を死なせてよいものでしょうか。本当の国益は国民の平和にあるのです。徳川慶喜は人命を失わないために江戸城を明け渡しました。ガンジーは無抵抗主義を貫きインドを独立に導きました。「負

けて勝つ」を実践したのです。

独裁者

武者小路先生の短編で、独裁者も悪くないというものがありました。独裁者が真に国民の平和と幸福を考へて政治をとる。国民や側近の意見を取り入れ、正しく決断する。そんな国なら独裁者も悪くない。というものでした。

民主主義にも欠点は沢山あり、特に資本主義は欲望を助長することで大きな欠点を持っています。しかし、独裁者の支配する政治というものは、多くの場合人権が尊重されず、人命さえも尊重されません。自由が束縛され、言論の統制や束縛をされることが多いのです。そんな国の国民は不幸といつてよいのではないのでしょうか。

犯罪

「浜の真砂は尽きるとも、世に悪の種は尽きまじ」という言葉があります。石川五右衛門が釜茹での刑に処さられるときに詠んだ歌と言われています。人の世に悪はなくならないということです。人は本来悪なのか、

善なのかという議論は宗教上、哲学上で研究されてきました。私もこのことをよく考えます。人間にはキリスト教で言えば「原罪」仏教で言えば（正確ではありません）「業（ごう）」というものがあって、人間は本来悪なのだと思います。そうかもしれません。私の中にも悪の芽は沢山あります。悪に走らないのは法律があるからです。罰を受けるから悪事を働かないのです。人は躾や教育によって悪を働くことにブレーキがかかり、良心が生まれるのです。躾や教育の不十分だった人、あるいは特別な事情で突発的に犯罪を起こしてしまう人。育った環境などにより精神が破壊され（精神病というわけではありません）極悪非道なことをしてしまう人。置かれた環境の中で（戦争のような）様々な理由で犯罪が行われます。

性善説

人間は良心というものを、生来持っているのではないかと考えることもあります。確かに心の中に、美しいものを愛する心、不幸な人に同情する心、理不尽に対する怒り、他人の幸福を喜ぶ心、勧善懲悪を喜ぶ心、進歩すること、優れたものになることを喜ぶ心、

等が存在します。これは後天的に獲得したものとは思えません。これらは自然に湧き上がるもので、教育や躾で獲得したとは思えないのです。トルストイと先生はこれを「人類の意思」と呼びました。

人を良い方向に導くもの、それが人類の意思である。ということですが。その人類の意思は人類を導いてはいるものの、諸悪によって妨げられています。人類のユートピアはいつ実現するのでしょうか。今、核によって人類が滅亡するかもという危険をはらんでいます。どんな悲劇があっても人類は、人類の意志を貫いてほしい。またそうなると信じています。

終わりに

とりとめのないこと、突っ込みどころの多いことを書きました。人類の意思、新しき村の精神はまだまだ人類に浸透しきれてはいません。しかし、前進していることは事実です。「君は君、我は我なり、されど仲良き」という精神が全世界にいきわたることを祈って筆をおきます。

「家内安全」と「全世界の人が幸せでありますように」これは私が神社でもお寺でもお祈りする言葉です。

実篤人生詩集

「この道より」

武者小路 実篤

進め進め

自分達は後悔なんかしてられない。
したいことが多すぎる。
進め、進め。

麦が出来そこなった！
それもいいだろう
あとの為になる
進め、進め。

家が焼けた！
それもいいだろう
新しい家がたつ
進め、進め。

人がぬけました

仕方がない、

更にいい人が入るだろう

進め、進め。

何をしたらいいのかわからない！

しなければならぬことを

片っぱしから、忠実に。

進め、進め！

こんな歩き方でもいいのか。

いいのだ。

一歩でも一寸でも、信じる道を

進め 進め。

神がよしと見た道は

まちがいのない道だ

進め 進め。

兄弟姉妹の

幸福を祈って、

進め 進め。

つい足をすべらした

かまわない、

過ちを再びするな

進め 進め。

後悔なんかしてられない

したいことが多すぎる、

進め 進め。



実篤人生詩集「この道より」(1993年4月30日小学館発行)の表紙

会員だより

■ 新会員

関口 淑江 鳥取県倉吉市
 神保 正道 東京都新宿区
 神保 朱美 東京都新宿区
 株式会社星河 東京都千代田区
 税理士法人T A C T高井法博会計事務所
 岐阜県岐阜市

■ 維持管理会計

■ 会費受領(数字は西暦 千〇年〇月)
 (個人会費)

関口 淑江 23 1 | 23 12
 初見 翔 23 1 | 24 8
 吉田 真一 23 2 | 24 1
 山田 修一 23 3 | 24 2
 久保喜美子 23 5 | 24 4
 小田切秀夫 23 1 | 23 12
 小島 由江 23 3 | 24 2
 倉敷ミチ子 23 3 | 24 2
 久保 義信 23 5 | 24 4

角田 正恵 23 3 | 24 2
 神保 正道 23 3 | 24 2
 森 秀夫 23 3 | 25 2
 茶谷 康 23 5 | 24 4
 松島 昇 23 5 | 24 12
 神保 朱美 23 3 | 24 2
 浅見五百子 23 4 | 24 3
 小林 雅司 23 5 | 24 4
 辻本由美子 23 7 | 26 5

■ 賛助会員会費

株式会社星河 50
 税理士法人T A C T高井法博会計事務所 50

■ 「新しき村」購読料

一名 1.8

■ 新しき村事業会計

■ 寄付

川野今朝治 30
 株式会社あさひテクノメンテ 75

(単位:千円) / 2022年12月29日 ~ 2023年2月28日



【茶】増田荘の紅梅が見頃を迎えている。白梅も蕾をふくらませている。牛舎は取り壊されたが一角に雪柳が小さな花を数輪見せている。今日は立春。強風や寒波があり、これでも温暖化か?と疑う。このところ雨が降らず乾燥が続いている。茶の作業は除草して落葉の敷き込みをすることである。中央茶園の西川さんの栗林側から始めている。森山さんが刈り払って下さったので随分作業が助かっている。それでも手入れを行っていない部分は笹やかからす瓜があり手間取る。

三月の製枝に向けて全力で取り組むべくやっています。

(和田東市)

【竹林】この冬は一一月の末に霜が降りた。竹林の間伐は初冬にやるものだが、一番霜と二番霜の中間がベスト。と教

えて下さったのは前久保にお住いの靴屋の吉沢さんだ。実家が鳩山町で、竹林があったとのこと。

いま書いたように、一一月のうちに霜がおりたので、一二月に入ったら始めていいのだけれど、年内は半分もやれなかった。そして年が明けて急いで始めた。例年のように新しいノコギリを一本購入し、気合いを入れてやった。月半ばに終え、村木さんと由江さんにバトン・タッチ。枝払いと三・二メートルに切断する作業をやつてもらった。

そしてその後は真竹のフィールドの間伐に入った。その真竹の作業は一月二四日(火)に終了。百三十本だった。

去年も書いたかもしれないが、竹炭が売れないので真竹の間伐材は切り倒した直後に運び出すことはしないで、フィールドの隅に積んでおくだけにしている。なにしろ百本を超えるのだから竹棹の山が二つも三つもできる。

その後、適当な時に都電の下まで運び、燃やして灰にして灰を利用して。村外会員の早川由美子さんがその

作業を担当、灰を生かしている。

ところで、いま気がついて少し驚いたのだが、手許に孟宗竹の間伐の記録が残っていないかった。孟宗竹の場合、正確に計ったことがないが、一本の棹は太いものになると百キロくらいあるのではないか。それを切り倒すのはかなり危険を伴う。現実これまでチラホラ怪我をした。したがってその日に何本切ったかは頭に残る。しかし繰り返していれば日毎の数など忘れて当然だ。そのため記録をとっておくことはかなり大切になるのに、今回はそれをやっていないかった。

竹専用のノートを作つてあるのに、日毎どころか今期の合計の数も書いていない。嗚呼！百本弱だったと思う。話は少し変わって、私はこの4月から村の外に仕事を持つ計画で、その方針が私が新しき村の存続と発展を期する構想の骨格で、いまそれに向かつて死力を投じている。

それが実現した場合、わたしは竹林担当者から離れる必要が生じるわけで、

是非わたし以外の人に後を継いでもらいたい。例えば一月号のこの欄でふれた柿と、村内に二五本ある柚子の木を生かせば、一人分のしごとになる。まして梅を再開すれば。そんなことを考えている。

今入ったニュース。私の仕事を手伝ってもらい、その代わりに勉強を個人指導してきた鳥貫ハル君が筑波大学附属坂戸高校に合格したという電話が来た。倍率は二倍を超えた。

たしか高橋久志夫さんや本間文枝さんの出身校。ハル君と人類の未来について考えてゆきたい。

(小島真樹)

【田圃】年末に、二日にわたつて行つていた恒例行事である主にお客様に向けたお正月用のし餅を作るための餅つきは、手伝いの方が十名以上来て下さる。昨年までは容子さんが、お昼のお雑煮や、あんこ、きなこ、おろし、漬物等用意して下さいたけれど、今年はその用意が出来ないあとと思ひ、それ

が一番心に引つかかっている、けっこうぎりぎりまで、やるかやらないか決められずにいた。和田さんには、やった方がいいよと言われた。お昼は手弁当で行きますよ、と何人もの人に連絡をもらった。そうこうしているうちに小島由江さんがお昼の準備をして下さるといふことで、その御好意に甘える事にした。二十四日の午後、由江さんと一緒にスーパーへ買い物に行った。帰ってから夜まで、寒い厨房でお雑煮の下準備と、大根と人参のなますを大量に作って下さった。僕はその塩漬けしたものをぎゅうと握って水気を切るお手伝いをした。こういう料理は、自炊の時に作らないので、とてもおいしく感じる。そんな時、倉敷さんが椎茸作業舎の水道管が破裂しているのに気が付き、見に行ってみると勢い良く水が噴いていた。それで寺さん家に電話して、食堂の水を止めずに壊れた箇所を止めるための栓の位置を聞いて、懐中電灯で照らしながら探してい

たが、結局寺さんと美穂さんが暗い中歩いて来てくれて、ようやく水は止まった。とっても冷える夜だった。そして二十五日はおいしいお雑煮となますと白菜の浅漬けを、二十八日はそれに加えてあんこ餅ときなこ餅もおいしくいただきました。由江さんお疲れ様でした。本当にありがとうございました。二十八日には本間容子さんからあんこの差し入れをいただきました。ありがとうございました。

二十五日、白餅十一臼、玄米餅七臼(合計糯米六九kg)、参加者敬称略、稲垣喜弘、稲垣壽美子、岩切節子、長谷川健司、稲葉江利加、山田修一、浅野貴志、樋口正浩、小島真樹、小島由江、川辺賢一、丸橋ユキ、小田切正雄、倉敷幸児
二十八日、白餅十二臼、玄米餅十臼、(合計糯米八四kg)参加者、樋口正浩、小島由江、小島真樹、和田東市、川辺賢一、森山真久、宮田明彦、後藤秀三、富山朋子、富山晃、富山亜音、松本真寿、黒澤しほ、二俣義浩、二俣玲子、小田

切和夫、小田切敬子、小田切正雄、倉敷幸児。

亜音君、真寿君、しほさん、三人は高校二年生、若い力を存分に発揮してくれました。富山さんは、長年のお米のお客様で、昨年に続いで参加です。西東京市からと、遠いのに朝八時過ぎに来て下さいました。

新年明けて十三日からまた再開し、二十、二十七日と、金曜日の餅つきは二月も続きます。上尾市の村外会員の松島昇さんが二回来て下さいました。毛呂山台の根塚恵子さんも時々来て下さいます。

餅つき以外の野良仕事は、主に林の整備である。雑木や笹竹を切っては運んで燃やす。これは稲垣さんと一緒にやっている。力を込めて鋸を連続で引いていると、寒い日も体が暖まって来るから良いですね。松島さんとも一度一緒に林で仕事をした。なかなか終わらない作業だが、出来るだけはやる。

(小田切正雄)

室	編
	集

令和五年一月号から、全ページでフルカラーとし、印刷・デザイン・内容ともに大きく変更しました。

今回は、実篤の画について特集しました。実篤は、四〇歳になった頃から絵を描き始め最初は大変下手で殆ど毎日画をかいて画をかき始めて一〇年経過したとき一番下の娘さんが一〇歳位の時「パパは又たきつけをつくっている」とひやかされたが、その後数年たつて縁側で画をかいていると「…いくら下手でもうまくなる」と言つて前を通つて行つたとのこと。

実篤の画が多くの人に感動を与えられるようになるまでには、勉強、勉強、勉強の毎日であったこと、そしてそれを証するものとして八〇冊以上のデッサン帖が残されているので、本号でその一部を紹介しました。併せて独学で芸術的な絵画を描くまでいかに努力したかを知るうえで必要と思ひ志賀直哉の文も転載しました。

本号から調布市武者小路実篤記念館とできるだけ連携を密にして同記念館から投稿してもらおうようお願いしています。本号では、記念館の紹介と春の企画展一〇頁分を投稿してもらいました。

(千賀 修一)

原稿募集

会員からの投稿を募集しますので、会員になつたきつかけとか新しき村の精神を日常生活にどのような生かしているか実篤の名言等についてお書きくださると良いと思います。

会員以外の方から新しき村に関すること又は実篤の作品・名言等についての投稿お待ちします。

原稿は、五〇〇字〜二〇〇〇字・原稿用紙又はワードで作成。ワード作成は横書き・書式自由です。原稿用紙で作成の方は、新しき村まで郵送してください。

ワードで原稿作成の方は、メール (sanga@t-100.com) で送付して下さるようお願い申し上げます。

「新しき村」編集責任者 千賀修一

新しき村の会員 募集

● 村内会員

新しき村に入村して、新しき村で生活する会員です。入会の要領・その他については、村内会員規則で定めています。ホームページで見てください。

● 村外会員

以下の三種類とし、会費を添えて申し込めば誰でも村外会員となることができます。

- 一 個人会員 新しき村の精神に賛成して入会を希望する個人
- 二 賛助会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を賛助する者。
- 三 維持会員 団体又は個人で、当法人の事業活動を援助する者。

会員は、会員種別に応じて毎年左記の会費を納入しなければならない。

- 一 個人会員(A)六千円 (B)一万円
- 二 賛助会員一口 五万円
- 三 維持会員一口 五〇万円

会員は、次の特典を享受することができます。

- 一 当法人が発行する雑誌「新しき村」を無料で配布を受ける。また、個人会員(B)・賛助会員・維持会員に対して実篤カレンダーを贈呈する。
- 二 当法人が主催する行事に招待を受ける。

入会を希望される方は、ホームページで入会申込書をダウンロードして新しき村までFAX(〇四九一二九五―五三九八)又は郵送して下さるようお願いいたします。

会費・誌代・寄付 送金振込先

■郵便振替口座

00110-6-182967

一般財団法人 新しき村

■埼玉りそな銀行越生毛呂山支店

普通預金口座 NO 754078

一般財団法人 新しき村

E-mail:info@atarashiki-mura.or.jp

URL : <http://www.atarashiki-mura.or.jp/>



村の近くの県道にバスが通っています。次の番号に電話すると詳しい時刻を教えてください。JR八高線を利用する人には便利です。
042-973-1161 国際興業バス飯能営業所

新しき村HP

新しき村

検索



新しき村の精神



一、全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させる事を理想とする。

一、その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない。

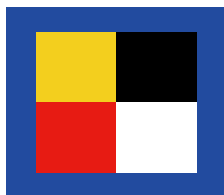
一、その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快樂、幸福、自由の為に他人の天命と正しき要求を害してはいけない。

一、全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとる事で、全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を樂しみ正しく生きられ、天命（個性もふくむ）を全うする道を歩くように心がける。

一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能を信じ、全世界の人が實行する事を祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である、我等の兄弟姉妹である。

一、されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。

一、されば我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである。



新しき村 第76巻 第2号

令和5年3月16日発行

発行者 / 武者小路知行

編集責任者 / 千賀修一

デザイン編集 / 山口千穂・写真データ協力 / 稲垣喜弘

発行所 / 一般財団法人 新しき村

〒350-0445 埼玉県入間郡毛呂山町葛貫423番地1

TEL・FAX 049(295)5398

印刷 / 東京カラー印刷

■本誌は会員には無料送付、会員外の直接購読料は1冊300円です。